

「日本人」を考える：古代日韓交渉史から

著者	佐古 和枝
雑誌名	関西外国語大学人権教育思想研究
巻	13
ページ	52-100
発行年	2010-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00005743/

「日本人」を考える～古代日韓交渉史から

佐古 和枝

はじめに

歴史を学ぶ意味とは、たんに過去に起きた歴史的事実を知識として知ることではない。歴史とは、何百年、何千年、何万年という長きにわたり蓄積された、多種多様な環境における人間の生き方とその結果の百科事典のようなものである。それをひも解けば、人間社会には、われわれが思いもよらないほどさまざまな価値観や行動パターンが存在したことがわかる。そして、現代的な常識や価値観が必ずしも絶対ではないということに気がつけば、より広い視野で現代と未来に向きあうことができるだろう。まさに歴史とは、いまのわれわれの姿を映す鏡なのである。

現代から遠く遡るほど、現代的な常識や価値観を揺さぶる場面は増える。そういう意味で、考古学や古代史は、現代人にとって発見の宝庫であろう。歴史とは、現代社会が抱えているさまざまな問題について、日頃とは異なる視点で考えさせてくれる「場」でもある。

小論では、考古学・古代史の立場から「日本」および「日本人」とは何なのかについて考える材料を、大陸とくに朝鮮半島との交渉史のなかから提示してみたい。

1. 「日本人」とは何なのか～学生の反応から

「日本人」には、さまざまな定義がある。人類学者の尾本恵一によれば、日本人の定義には①日本国民（法的）、②日本国の人民（歴史学）、③日本の民族（民族学）、④日本列島のヒト集団（人類学、遺伝学）という4つの定義があり、「例えば、元大関の小錦は、塩田八十吉という日本国民で、法律的には日本人だが、人類学・民族学的にいえばハワイ出身のポリネシア人」ということになる¹。日本国籍をもつからといって、小錦さんを「日本人」だ

と言う人は少ないだろう。逆に、08年にノーベル物理学賞を受賞された南部陽一郎さんは、アメリカ国籍をもつという断りつきで日本人受賞者の一人として報道された。多くの人々は、国籍とは違うところで「日本人」か否かを判断しているようだ。いったい日本人は、「日本人」を何者だと考えているのだろうか。

上記の分類でいえば、筆者は歴史学の立場である。従って「日本人」とは、中世史の網野善彦の定義に倣い「[「日本」という国制の下にある人々」という認識にたつ²。だから、考古学や日本学研究の授業で、旧石器時代はもとより縄文時代にも弥生時代にも古墳時代にも、「日本人」は存在しないという話をする。すると、学生たちは怪訝な顔をする。「日本人」や「日本」の意味や成り立ちについて深く考えたり教わる機会がなかったのだろう。実際、「日本という国は、いつ成立した?」とか「天皇制は、いつから始まり、どういう意味をもつのか?」と尋ねても、ほとんどの学生が答えられない。

網野善彦がしばしば警鐘を鳴らしたように、律令制成立以前に「日本」という国はなく、だから「日本人」も存在しない³。それはフランスとかブラジルという国が誕生する以前にフランス人やブラジル人が存在しないのと同じである。そう説明をすれば、ほとんどの学生は素直に納得してくれていた。だが、同じように話をしているにもかかわらず、この数年「ショックだ」という感想を抱く学生が、少数ながら毎年現れるようになった。なぜショックなのかと問うてみるが、明確な答えは返ってこない。なんとなく、なのである。疑いもしなかった自分の所属やルーツ、アイデンティティーが揺らぐような気がして不安に思う気持は、わからぬではない。それにしても、なぜ最近こういう反応が出てくるようになったのか、いささか気がかりである。

だが、それは彼らの責任ではない。多くの日本国民も同様なのである。それどころか、何年前かに現在の天皇家の跡継ぎ問題が議論になった際、一部の国会議員や文化人・作家・評論家の人達が「天皇家2000年の歴史」とか、極端な場合は「2600年続いた天皇家」などと発言しているのを聞いて驚いた。戦後の民主主義国日本は、皇国史観を否定することから始まったのではなかったのか。もっとも、神武即位という虚構の日を「建国記念日」にして

いる国なのだから、今さら驚くことでもないのかもしれない。「建国記念日」とは何なのかと、疑問に思う人もほとんどいない国である。敗戦の反省と総括が、いかに中途半端であるかを思い知らされる。

それにしても、日本という国がいつ誕生したかも、日本という国名の意味も、天皇とは何なのかも、さらには日本人とは何者かということも、国民のほとんどが答えられないとは、なんとも不思議な国である。天地創生以来、「日本」列島と呼ばれる島々には「日本」という国があり、だからそこで暮らす人間は「日本人」なのだ、まるで自明の理であるかのように思っている。あるいは、「日本」とは、「日本人」とは何かということほとんど考えたことがない。それがこの国の特性なのである。長らく抱え続ける病いと言ってもいい。まわりを海に囲まれて、日常的に「他者」の存在に脅威を感じるものがほとんどなかったためか、自己認識が極めて曖昧である。そのわりに、「日本人」としてのこだわりは強く、他民族を受け容れる度量は狭い。いったいそういう人達のいう「日本人」とは、どういう集団なのだろう。

逆に「だったら、古墳時代以前の人達は、何人と言えればいいのですか？」と学生達は尋ねてくる。旧石器時代については、「旧石器時代に日本列島に住んでいた人達」とか「日本列島の旧石器時代人」と言うしかない。縄文時代は縄文人といい、弥生時代は弥生人と呼んでいる。ただし、稲作文化とは異なる文化を展開した北海道や沖縄の歴史には、稲作文化によって規定された「弥生時代」や「弥生文化」がないのだから、弥生人と呼ぶことはできない。

弥生時代の人々について、倭人という呼称が使われる場合もある。倭人とは、本来東シナ海沿岸地域の稲作漁撈民をさす古代中国の言葉である。それが、次第に地域が限定され、紀元後1世紀には日本列島の人々の呼称となっていることが『漢書』地理誌で確認できる。『魏志』東夷伝をみれば、3世紀には、中国側からみて朝鮮半島南部の人々を「韓人」、北部九州の人々を「倭人」と呼び分けるほど、両者の文化的な違いが認識されていたこともわかる。しかし倭人とは、もともと稲作漁撈民をさす言葉だから、弥生時代にも狩猟採集を主たる生活基盤にした東北・関東地方や南九州、あるいは西日本でも山岳地帯の弥生人を倭人と呼ぶことはできない。

「日本人種とか日本民族っていう捉え方は、できないんですか？」と、学生は最後の関門にたどり着く。ここが問題なのだ。人種とは生物学的分類である。かつては、コーカソイド、ニグロイド、モンゴロイド、オーストラロイドなど、人類は3～4種類に分類された。しかし、それらの定義や区分は曖昧で、典型的な特徴の違いでしかない。とくに近年、ミトコンドリアDNAの研究により、現生人類は約12万年前にアフリカに登場した種であるという見方が強まった。そうだとすれば、現生人類は共通の祖先から生まれたものであり、かつておこなわれた人種の区分は、同じ種の地域的多様性にすぎないことになる。いずれにしても、グローバル化が進み、国境を越えた移住や異民族同士の結婚は、すでに珍しいことではなくなっている。現実にはアメリカ合衆国では、中国・韓国・日本からの移住者の子孫達の間で結婚が日常化しており、日系という意識も薄れ、在米アジア人と総称するしかない状況だと聞いている。人種という生物学的分類は、もはや不可能である。

民族についてはさまざまな定義があり、一筋縄ではいかない。ごく一般的に「言語、文化、歴史、所属意識を共有する集団」と考えるとしても、「言語、文化、歴史、所属意識を共有する集団」としての「日本民族」という定義は、果たして可能なのだろうか。

筆者には、人種・民族・国家の定義について詳細に論じる力量はない。けれども、この国の歴史を辿ってみると、少なくとも前近代に、列島全体が「言語、文化、歴史、所属意識を共有」したといえる時代など、あったといえるのだろうかや疑問を感じる。古代においては、なおさらである。では、ハードルをもっと低くして、「大陸と異なる列島人」という形質人類学・民族学的な分別は可能かどうか。それを考古学・古代史からみていこう。

2. 「日本人はどこから来たか」という問い～列島で暮らし始めた人々

標記のようなタイトルの本を時々みかけるが、こうした本を書くことができるのは、人類学者だろう。前節で明らかのように、歴史学の立場では、このタイトルそのものに無理がある。

けれども、「日本人のルーツとなる人々の故地は、大陸のどこなのか」と

いう意味で、列島に最初に住みついた旧石器時代の人々の系譜が問われているのなら、考古学にも発言の余地がある。列島の旧石器時代の人々の故郷を知るためには人類化石の比較検討が必要なのだが、残念ながら事例が乏しすぎて、現状では期待薄である。となれば、石器文化の系譜を比較検討する考古学の研究成果を手がかりにするしかない。

約250万年前から約1万5000年前まで続く旧石器時代の間、地球には4万年から10万年の周期で氷期が訪れている。氷期には陸地の水分が凍結して海に流れこまず、海水面が下がる。氷期の最寒冷期には、平均気温が今より5～7度低く、海水面は120～140m下がって日本列島は大陸と地続きとなり、食べ物を求めて拡散する人類やさまざまな生き物が当地にやってきた。日本列島の人類史の始まりはいつ頃なのかを知る手がかりは、列島最古の遺跡の時期である。

最後の氷期であるウルム期（約7～1万年前）のなかで、3.5万年前頃から日本列島を含む東北アジアの広い範囲で後期旧石器時代が始まる。その最寒冷期は約2万年前であり、北のシベリア方面からも西の朝鮮半島方面からも、列島に人類がやってきた。この時、朝鮮海峡に完全な陸橋が形成されていたかどうかは意見が分かれているが、日本海の表層は淡水化しているので、海峡があったとしてもごく狭く、結氷期には往来できたとみていい（図1）。実際、現在わが国では約5000ヶ所の後期旧石器時代の遺跡が確認されているから、この頃に人類が暮らしていたことに疑いの余地はない。

それを遡る前・中期旧石器時代の遺跡については、近年の旧石器発掘捏造事件の検証作業によって、そのほとんどが捏造だったことが明らかになった。しかし、後期以前に遡る確実な遺跡として、約9万年前の岩手県金取遺跡がある。さらに09年には、島根県砂原遺跡で発見された旧石器が約12万年前のものであることが明らかになり、約13万年前の最寒冷期に朝鮮半島方面から人類が渡ってきた可能性が強まった。いまだ情報量が乏しく、当時の人々の系譜や文化を語るに至らないが、発見例の増加が期待される。

後期旧石器の比較でいえば、列島の文化内容は、広くシベリア・中国・朝鮮半島と共通するものである。大きくみれば、北海道から東北にかけては口

シア極東・シベリアの影響を受け、中部・関東以南から九州にかけては朝鮮半島から中国に繋がる系譜が想定されている⁴。日本列島の旧石器時代人は、北からも西からもやってきて住み着いて、縄文人になっていくのである。「どこから来たか」と問われても、それ以上答えようがない。それが考古学からの答えである。

3. 縄文人と大陸交渉

1万5000年ほど前⁵、地球の温暖化にともなう環境変化は、人々の生活の仕方にも大きな変化をもたらした。照葉樹林や落葉樹林が広がり、植物や樹

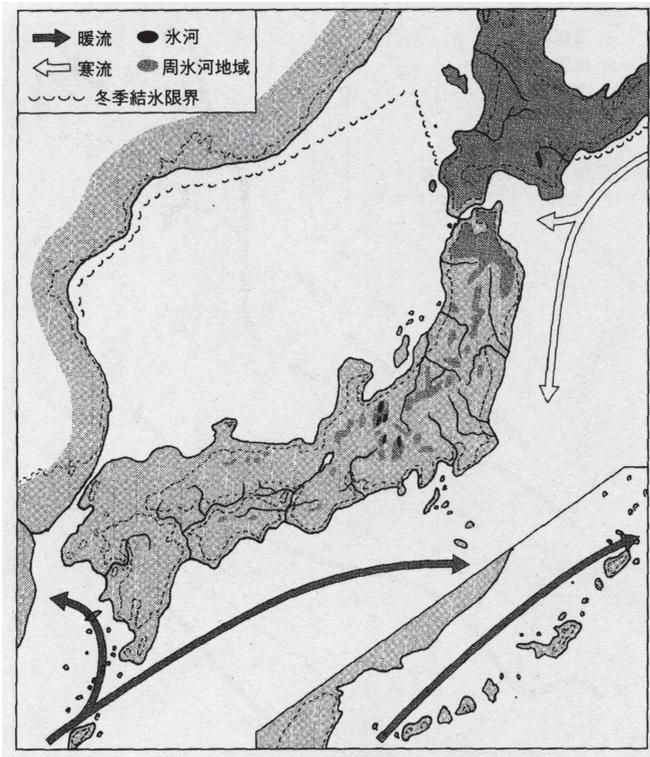


図1 約2万年前の古地理図
(町田洋「日本列島の形成史」奈良文化財研究所編『日本の考古学』(上) 学生社2005年より)

木の利用のために土器や磨製石器が出現した。縄文時代の始まりである。温暖化により海が上昇して大陸とは離れて島になるが、土器の出現期の文化内容をみると、北方から何度かの移住の大きな波があったと考えられている⁶。しかし、この時の渡来集団が在来集団に与えた形質的な変化は、さほど大きくなかったようである。縄文時代の人骨の特徴は、沖縄諸島から北海道までのエリアで多少の地域の特徴は存在するものの、概して大陸の新石器時代人よりも列島の旧石器時代人に似るといえる⁷。

かつて縄文時代は、列島は大陸から離れて孤立した状態であり、列島内でさまざまな文化が独自に熟成されたと理解されていた。けれども現在では、さまざまな文物が大陸との関係を示していることが明らかになっている。

約6000年前の縄文時代早期末から前期に九州地方を中心に中国西部、山陰まで広まる縄文式土器や、それに続く前期中頃の曾畑式土器は、同時期の他の縄文土器とは異質であり、明らかに朝鮮半島南部の土器の流れを汲んでいる。また、これらの土器にともない、大陸との繋がりを示すさまざまな漁具類が出土する。

たとえば西北九州型結合釣針は、針と軸を別々に作って結びつけた大型の釣針で、マグロやタラなどの大形海水魚の捕獲に用いられたものと考えられている。同類の結合釣針は、朝鮮半島東北部から沿海州、アムール川流域まで広く分布しており、さらにザ・バイカルやアンガラ川流域にまで及んでいる。また同じく西北九州にみられる漁具の石鋸は、鋸状の割りこみをつけた小形石片を棒状の骨片の両側に植え込んだ組み合わせ式の銚なのだが、これも朝鮮半島東北部、アムール川流域、ザ・バイカル周辺地域に共通してみられるものである⁸。漁民の行動範囲は広大である。朝鮮半島を越えた往来は、縄文時代からあったのだ。朝鮮半島南部でも、九州の土器や佐賀県腰岳の黒曜石製の石鋸、西北九州型の結合釣針が出土しており、九州の縄文人が渡海していることがうかがえる。

この時期、大陸との繋がりを示す遺物は、九州地方に限らない。1970年代、縄文前期の福井県鳥浜貝塚では、ヒョウタン、リョクトウ(アズキか)、エゴマ、シソ、アサなど、日本列島には自生しない植物の種子が出土した。大陸から

もちこまれた栽培植物である。それ以後、各地の遺跡でこうした栽培植物が確認され、もはや珍しいことではなくなった。

また早期末から前期にかけて、北海道から九州にかけて分布する玦状耳飾りは、8000年ほど前、中国東北部の遼西一帯に現れ、沿海州や東南アジアを含む東アジアの広い範囲に分布する。この頃東北・北陸・関東で出土する篋状垂飾も、中国・朝鮮半島・沿海州にかけて分布するもので、玦状耳飾りとセットとなる可能性が指摘されている⁹。こうした石製装身具は、中国東北部や沿海州からの影響とみられ、北の玄関口を通した大陸交流によるものと考えられる。

縄文時代の列島は、決して大陸と断絶・孤立していたのではなく、西は九州から朝鮮半島へ、北は北海道から樺太・沿海州へと繋がるルートがあり、人やモノが移動していたことがわかる。弥生時代になって、突然に大陸との交流が始まったわけではないのである。

4. 弥生時代の渡来人と在来人

(1) 稲作導入前夜の日本列島

紀元前6世紀頃、朝鮮半島南部から北部九州に水稻農耕がもたらされた¹⁰。弥生時代の幕開けである。稲作は、朝鮮半島からの渡来人が伝えたという見方が一般におこなわれている。しかし、なぜこの時期に突然渡来人がやってくるようになったのかは、あまり言及されていない。渡来人の問題を考える時に重要なことは、どういう契機や目的で彼らが渡来したのかということである。沿岸地域の住民が半農半漁の生活をし、船の操作も知っていたとしても、農耕社会の人々が大海を渡ってまで移住するというのは、格別な要因が存在したはずである。

この時期の渡来人出現の背景について語る史料はないのだけれど、この時期、中国は春秋時代にあたる。戦乱の世を逃れて周辺地域に移住する人々の波が朝鮮半島にも及び、朝鮮半島も社会不安に陥った。そのことは、防衛的環濠集落の出現、武器の普及などから窺える。一方、縄文時代の列島は、武器をもたない平和な社会だった。推測の域をでないけれども、戦乱の緊張状

態から逃れ、平和な土地へ移住しようという欲求が、朝鮮半島南部の人々をして海を渡らせたのではないと思われる。

世界史的にみれば農耕は、中国や西アジアで紀元前約10,000年頃から始まる。日本列島は、農耕の開始がきわめて遅い。かつては、島国で孤立していたために、農耕文化が伝わるのが遅れたのだという説明がおこなわれていたが、前述の如く縄文社会は決して孤立していたわけではない。実際、縄文時代の後期・晩期に、東北地方でコメ、ガラス玉、青銅器、磨研の壺など、大陸の農耕文化にともなう文物が出土している。農耕についての情報も伝わっていただろう。しかし、本格的な農耕の開始は、それから2000年近く後のことである。それは、なぜだろう。

世界の民族調査によると、乾燥ステップという悪条件でも、狩猟採集民の女達はわずか6時間の労働で一家族が3日間食べられるだけの食料を集め、男達のおこなう狩猟は必要に迫られてというより、腕を競い合う楽しみといった方が実態に近い。それに対して、原初的な農耕民は、日々の農作業という重労働に加えて、天候不順や病害による不作に脅かされ、定住による心的ストレスも高いという¹¹。ならば、なぜ人々は、肉体的にも精神的にも豊かな狩猟採集生活を捨て、労働強化とリスクやストレスをともなう農耕生活を選んだのか。その要因には、気候変動による食糧不足、人口密度の増大にともなう資源ストレス、定住・貯蔵・交易など社会的要因など、さまざまな仮説がたてられているが、アジア大陸の東端と西端でほぼ同時期に農耕が始まったのは、紀元前9000年頃から数百年間続く一時的な寒の戻り（ヤンガー・ドリラス期）と関係がありそうだ。寒冷化により狩猟採集で得られる食糧が不足し、必要に迫られて自分達で食料を作りだそうとしたのだろう。

それに対して日本列島は、海の幸・山の幸・川の幸に恵まれていたために、この時期の寒冷化のダメージはさほどではなく、農耕の必要を感じなかったと推測される。新しい技術や文化は、受け入れ側が必要としなければ根づくものではない。弥生時代を通じてみても、鑄造鉄器の技術、青銅製の容器や農具など、列島にもたらされなかった朝鮮半島の文物も多いのである。大陸から進んだ技術や文化がもたらされることを、あたかも水が高いところから

低いところへ流れるように、列島側はただ無作為に受容したと思っている人も少なくないけれども、そうではなく、明らかに列島側が取捨選択して取り入れているのである。大陸文化の「受容」というより、「導入」と言うべき主体性が、そこにはある。

では、なぜ紀元前6世紀頃になって、水稻農耕が始まるのか。稲作の導入と定着・普及の要因を、稲作前夜の列島のなかで確認しておこう。縄文時代の遺跡は西日本より東日本の方が圧倒的に多く、その内容も豊かである。狩猟採集生活には、西日本の照葉樹林より東日本の落葉樹林の方が適していたためと考えられている。縄文時代中期に東日本の縄文文化は最盛期を迎え、人口もピークに達する。

ところが、後期から晩期にかけて、東日本で遺跡が激減していく。この時期は、地球が寒冷化した亜氷期にあたる。列島では平均気温が2度ほど下がり、かつ多雨であったことが、花粉分析の結果に示されている。そのため、狩猟採集で確保できる食料が乏しくなり、中期に膨れあがった人口を支えることができなくなったためと推測される。一方、西日本では徐々に遺跡が増え始めるとともに、東日本の土器や土偶などの遺物が出土したり、東日本的要素である環状集落や拔牙風俗、磨消縄文の手法などが出現する。東から西へと大きな移動・移住の波があったと考えられる。

そして縄文後期になると、西日本を中心に栽培植物の種類が急増し、イネ・オオムギ・ダイズ・アワ・ヒエ属・ハトムギ・ゴボウなどの畑作がおこなわれている¹²。しかし、この段階の畑作は小規模なもので、イネも畑作物の一種として栽培されていたとはいえ、さほどの生産量は期待できそうにない。畑作に比べ、水田は格段に生産性が高い。水稻農耕は、この時期に、より確実な食料確保への強い希求があったために受け入れられ、積極的に展開されたのである。

(2) 水稻農耕の始まりと渡来人

縄文時代にも大陸との往来があったとはいえ、水稻農耕が始まると縄文時代とはくらべものにならないほど朝鮮半島との繋がりは密になる。

弥生時代前期前半までの人骨は乏しいが、前期後半以降になると比較的多

くの人骨が出土している。それらを見ると、稲作地帯を中心に、縄文人とは大きく異なる形質をもつ人々が存在する（図2）。「渡来人」あるいは「渡来系弥生人」と呼ばれる人々である。

稲作導入期の時期の渡来人の存在は、人骨では確認できていないとはいえ、福岡市諸岡遺跡や佐賀県土生遺跡のように出土品から渡来集団のみで構成された集落とみられる遺跡があることや、出現当初の水田がかなり完成された形であることなどから、渡来集団の移住は実際にあったと考えられる。この時期、朝鮮半島南部に多い支石墓が西北九州各地に出現することも、渡来人の存在を物語っているとみてよからう。

渡来人はやってきた。ただし、初期農耕をおこなった集落の大半は、在来の土器や遺物の出土数の方が圧倒的に多く、在来集団（縄文人の子孫）と少数の渡来人が同じ集落に混住していたと思われる。稲作導入の初期段階に、渡来集団と在来集団の間で対立や武力衝突があったような痕跡は、いまのところ確認されていない。わが国は「閉鎖的な島国」と言われるけれども、この時期の九州島をみれば、まったく閉鎖的ではないことがわかる。閉鎖的な社会を作るのは、島国という地形的条件ではなく、あくまでそこで暮らす人間の問題なのである。

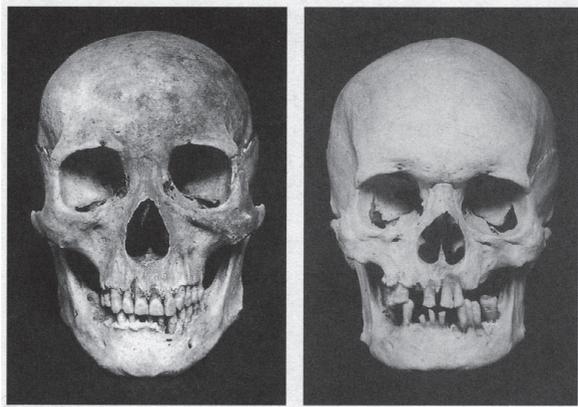


図2 弥生人の顔（左：北部九州・山口タイプ、右：西北九州タイプ）
（松下孝幸「弥生人」『縄文と弥生』クロバブ1997年より 左が渡来系、右が縄文系）

(3) 日本人の祖先とは？

日本人のルーツについて本格的に研究し始めたのは、幕末から明治初期に來日した西洋人達である。それまでは、江戸時代の新井白石などごく僅かに言及した人物はあるものの、「日本人とは何か」ということに関心を抱く日本人はほとんどいなかったようである。

西洋人達が展開する議論に刺激を受けて、日本人学者も日本人のルーツについて論じ始めた。明治・大正を通じてその主流となったのは、日本人の祖先は大陸からの渡来人とする説である。そして、現代日本人の祖先は稲作文化をもたらした渡来人であり、先住民である石器時代人（縄文人）を駆逐・征服して列島を占拠したのであり、アイヌや沖縄の人々は先住民の生き残りだという解釈が定説のように流布していた。

この背景には、1880年代に欧米列強によるアジア・アフリカの植民地化が猛烈な勢いで進められたことへの危機感から国粋主義的風潮が高まるなかで、日本人のルーツを“野蛮な”石器時代人から切り離し、高度な文化をそなえた大陸に求め、日本人の優秀性を示したいという意図があった。同時に、日本人の祖先の故地である大陸への領土拡張を正当化する主張と一体のものだった。なかでも、その故地を朝鮮半島とする「日鮮同祖論」の隆盛は、1910年の日韓併合へと繋がった。

しかし大正時代になると、考古学と形質人類学の両分野から、上記のような“定説”に疑問が投げかけられた。考古学では、イギリス留学で考古学を学んだ京都帝国大学の浜田耕作や東北大学の松本彦七郎が、それぞれの発掘調査の成果から、縄文文化と弥生文化の連続性を主張した。形質人類学では、京都帝国大学の清野謙次が渡来人と在来人の混血説¹³、東京帝国大学の長谷部言人が稲作導入という生活環境の変化による変形説¹⁴を提唱した。両者の結論は異なるが、いずれも石器（縄文）時代以来、日本列島に住んだ人々が現代日本人の祖先であるとし、民族の断絶・交代を否定した点では一致している。

戦後になって混血説が補強された。金関丈夫は、昭和30年代に発掘調査をした山口県土井ヶ濱遺跡（弥生前期後半）や島根県古浦砂丘遺跡（弥生前期

後半から中期)の成果を中心に、各地の遺跡から出土した弥生人骨を比較検討した結果、①縄文人と形質の特徴が異なる人骨は渡来人である、②しかし関東や南九州など非稲作地帯では、弥生時代になっても縄文人と共通する顔つき体つきである(図2)、③渡来人は存在したが数はさほど多くなく、弥生文化を主体的に推進したのは縄文人の子孫である、などの見解を示した¹⁵。

また、1980年代半ばに人類学の埴原和郎は、縄文人は旧石器時代以来、アジアに広く存在した古モンゴロイドであり、弥生時代に出現する渡来人は、2万年前の最終氷期にシベリア地方で生き残った寒冷適応した新モンゴロイドの子孫であるという説を提示した¹⁶。

両氏の見解は、現在も大筋では支持する研究者が多い。渡来集団は西日本を中心とする稲作地帯に移住し、関東や西北九州、南九州など、稲作に適さない環境の地域には進出しなかった。だから、それらの地域では縄文人の特徴が色濃く残るという見方である。

ただ混血説の弱点は、縄文晩期から弥生時代前期前半の人骨が、わが国でも朝鮮半島でも確認されていないことである。だから、縄文人と比較検討されているのは、前述の如く弥生時代が始まってから少なくとも200～300年経た弥生時代前期後半以降の人骨なのである。

変形説を主張した長谷川言人やその弟子である鈴木尚¹⁷が指摘したように、大規模な渡来者がいなくても、生活環境によって人間の形質学的特徴は大きく変化する。たとえば、同じ江戸時代でも、庶民と公家と将軍では、顔つき体つきがずいぶん異なることが確認されている。今の若者たちを見ても、かつて日本人の典型とされた「胴長短足で背が低い」日本人は絶滅しつつあるではないか。食生活や生活様式の変化によって、これほど短期間に顔つき体つきが変化しているのである。だから、いま「渡来系」と称されている弥生人達も、稲作文化の普及による生活環境の変化によって、人間の形質的特徴にも変化が生じた可能性はないのかという疑問が残る。

しかし近年、遺伝子学やウイルス学、あるいは遺伝性の強い頭蓋骨小変異や歯冠・歯根の形状分析など、新しい技術を応用した研究成果から、縄文人と北部九州弥生人の不連続性、北部九州弥生人と大陸人との共通性が提示さ

れ、渡来・混合説が補強されている。資料の増加とさらなる研究の進展を俟ちたい。

(4) 「渡来人」とは？

授業で朝鮮半島との交渉や渡来人の話をする時、必ずといっていいほど学生から「朝鮮半島の人達と、どうやってコミュニケーションをとったのか、言葉は通じたのか」という質問がでる。しかし、縄文時代の後・晩期に東北を含む東日本の縄文人がどんどん西日本に移り住むようになり、その波は九州にまで及んだという話をしても、「言葉は通じたのか？」という質問はない。現在の日本国内なら、大昔から同じような言葉を話し、海の向こうの朝鮮半島の人々はまったく異なる言葉を話していた、と思っているのである。

学界でも、朝鮮半島からの移住者を「渡来人」と呼び、その人達と在来人との結婚を「混血」というのは、それが列島とは異なる言語や文化をもつ人々だと認識しているからである。けれども、福岡から釜山までの距離は、広島までの距離とほぼ等しい。北部九州では、朝鮮半島から土器・石器・青銅器とさまざまなものがもたらされ、釜山周辺では北部九州製の土器や青銅器も出土している。一方、関東・東北地方では青銅器は稀であり、土器にも縄文が施されるなど、縄文文化の伝統が色濃く残る。北部九州の弥生人にとって、朝鮮半島南部との文化や言語の違いは、果たして関東・東北地方との違いより大きいものだったといえるのだろうか。

たとえば「対馬ちんぐ祭」という日韓合同の音楽祭がある。「チング」とは朝鮮語だと思っていたが、対馬の人は友達という意味の対馬の方言だという。調べてみたら、「ちんぐ」は五島列島の方言としても挙げられている。いつの時代にか、どちらからか伝わったのだろうが、それほど人の往来が頻繁であったということだろう。

工藤雅樹が指摘するように、われわれは、現在の国境もしくは古代国家成立以後の国家領域にとらわれすぎて、朝鮮海峡をことさらに厚い壁だと思っ
てしまっているのではないか¹⁸。そしてその壁のこちら側、つまり列島内であれば、互いにほとんど接触のなかった地域間でも同じような文化を共有していたと思って安心してしまっているのではないか。もちろん、だからといっ

て、朝鮮半島南部と北部九州は、同じ文化圏だったとは言えないほど違いも多いし、朝鮮海峡を渡るのはいはり困難なことではある。それにしても、大陸を「異国」だと思ふあまりに、列島内の地域文化の多様性についての認識がきわめて薄弱なのである。少なくとも近代以前の列島は、北海道・琉球を除いても、「日本文化」とか「日本人」と一括りに捉えられるほど均質な文化で覆われていたわけではない。そういう目で日本の歴史と歴史教育のあり方を見直す必要がある。

5. 「帰化人」と「渡来人」

さて、続いて古墳時代の対朝鮮半島交渉を取り上げる前に、整理しておかねばならないことが二点ある。その一つが「帰化」という用語の問題である。

現在も、日本国籍を取得することに「帰化」という言葉が使われている。しかし、本来これは歴史用語である。その意味を、どれほどの人が理解して使っているのかと懸念する。

「帰化」とは、「君主の徳に教化・感化されて、そのもとに服して従うこと」（後漢書童恢伝）である。その実態としては、他国へ移住し、政治上の手続きを経て移住先の国の民となることにすぎないとしても、「帰化（徳化・王化に帰する）」という言葉が「徳化・王化に帰する」という定義そのものであることは無視できない。

「帰化」の前提として、王権の存在があることは言うまでもない。「帰化」という言葉は、天皇家を中心とする中央集権国家建設のよりどころとして編纂された『日本書紀』のなかでたびたび使われ、「大宝律令」やその後の「養老律令」でも用いられている。日本の律令が手本にした唐の律令は、「帰朝」という表現を使っている。それを大宝律令が「帰化」と置き換えているのは、「天皇の徳化・王化」を強く意識していたためと推測される。ちなみに、『古事記』や『風土記』では、「帰化」という言葉は一ヶ所もなく、「来」または「渡来」と表現している。

戦後の日本古代史における「帰化人」研究は、倭国や日本の政治や技術、文化の発展に果たした役割を再評価する方向で始まった¹⁹。そして、「帰化人」

の果たした役割を高く評価し、「帰化人」を「われわれの祖先」として位置づけることにより、それまでの民族的差別観を帯びた「帰化人」に対する認識を改めようという善意の意図があった。

しかしそこには、一民族一国家を建前とする近代以降の国民国家的な意識が前提として存在していることは否定できない。また当然のことながら、すべての渡来者が、その国の「王の徳に教化・感化されて」渡来したとは限らないし、「みずからの意思で」渡来したとも限らない。だから現在では、「帰化」・「帰化人」に替わり、「渡来」・「渡来人」または「渡来系氏族」という表現が主流となっている。

しかし近年平野邦雄は、帰化とは単に異国人が渡来・移住したというだけでなく、きわめて政治的現象であって、「渡来または渡来人というような“物理的な移動”を示すことばでは、歴史用語にはならない」と、現代的観念で「帰化人」という用語を排除しようとするいまの趨勢を批判している²⁰。

たしかに「渡来人」という用語にも問題はある。そもそも「渡来」とは、「海を渡ってやってくる」という一過性の行為である。渡来してから数百年後の子孫かもしれないのに、縄文人と異なる形質の持ち主という理由で「渡来人」とか「渡来系弥生人」と呼ぶことに疑問も感じる。

けれども、「帰化」の前提には「天皇を中心とした単一民族国家」があるため、律令国家成立以前の時代には使うことができないのである。また、「帰化」という言葉がもつ「天皇の徳化・王化に帰する」という根源的な意味が、明治から戦前の朝鮮・台湾・アイヌなどに対する異民族同化政策推進論や韓国併合の正当化の主張のなかで頻繁に用いられたという事実は、やはり「現代的観念」として退けるわけにはいかないと考える。

従って小論では、用語上の問題は認めつつも、「渡来」「渡来人」「渡来系氏族」などの表現を使うことにする。そして、現在の日本国籍取得についても、「帰化」という用語は使うべきではないと思っている。

6. 「倭国・倭人」と「日本・日本人」

もう一つ整理しておきたいのは、古墳時代のこの国とそれに属する人々の

呼称である。3世紀後葉、大和の三輪山を間近に望む纏向の地に巨大な前方後円墳・箸墓古墳が出現する。考古学では、箸墓古墳の出現をもって古墳時代の始まりとみなし、それをヤマト王権の誕生とする見方が一般的である。以後、前方後円墳とそれにもなう葬送儀礼が日本列島に徐々に広まっていく。『古事記』や『日本書紀』（以下、あわせて記紀と略す）など文献の研究からも、屯倉みやけの設置、部民べみんの設置、氏姓制度など、徐々に国家と呼びうる体制が整っていく過程が確認できる。同じ頃、朝鮮半島にも百済・新羅・高句麗などの国が誕生した。それでは、古墳時代にヤマト王権を中心に成立した国は、何という名称だったのか。

『魏志』倭人伝では、卑弥呼が率いるクニグニの総体を「倭国」とし、卑弥呼を「倭王」と呼び、「親魏倭王」の金印を与えた。「倭国」や「倭人」は、中国から名づけられた呼称である。また、この段階の「倭国」は、魏と外交関係をもつ約30のクニの総称であり、列島全体を指す呼称ではない。

266年に「倭人來りて方物を献ず」（『晋書』）で、倭からの遣使記事は途絶え、次に現れるのは約150年後の5世紀（古墳時代中期）、いわゆる「倭の五王」の南朝遣使記事である。中国の歴史書は、倭の讚・珍・齊・興・武の5人の王が南朝に遣使したことを記している²¹。ここでも彼らは中国の皇帝から「倭王」もしくは「倭国王」の爵号を与えられている。ヤマト王権が治める「倭国」である。

ここで注目すべきは、珍と武が「倭国王」と自称し、その承認を求めるとい形になっていることである。個人・集団の名称は、他者との関係において必要となる。中国を中心とする国際社会に参入するにあたり、中国側からの呼び名であった「倭」を受け入れ、5世紀には自称として使うようになっているのである。また403年に建立された高句麗の好太土王の碑文でも「倭兵」の言葉が使われており、この頃、朝鮮半島でも「倭」と呼ばれていたことがわかる。

記紀では、「倭」と書いてヤマトと読ませている。ヤマトとは、岸俊男が指摘するように、もともとヤマト王権が誕生した大和の三輪山周辺をさす地名であったが、それが後に大和国と列島全土（「倭国」の領域）の両方の呼

称となった。大和も全土も発音は同じ「ヤマト」であるが、それを漢字で表す時、大和は「倭」、全土は「大倭」と区別して表記している²²。

『日本書紀』では、全土をさすヤマトを「日本」と表記することがある。本来「日本」の訓読みは「ひのもと」であり、「太陽が昇る方角」もしくはそこから派生して「もっとも東の端」という意味の一般用語であって、固有名詞ではない。室町時代の「日本将軍」とは、幕府の支配領域の最東端とみなされた東北地方経営の担当者をさしている。このように一般形容詞で列島全体を呼ぶのは、「豊葦原中国（豊かに葦が生えている国）」「葦原千五百秋瑞穂国（葦原に豊かに稲穂が実る国）」「大倭豊秋津嶋（トンボが飛び交う国）」「大八州国（大きな八つの島からなる国）」などの呼び方と同じである。

つまり、記紀や『万葉集』では、全土に対してさまざまな呼び方が用いられ、特定の呼称が定まっていたわけではない。そのなかで、『日本書紀』で「日本」という表記が使われるのは、人名を除くと対外交渉記事に限られている²³。

「日本」という呼称は、中国を中心とする東アジアの国際社会のなかで「もっとも東の国」という意味の名乗り方なのである。701年に制定された大宝律令で定められた天皇の詔書式でも、外国向けの場合のみ「明神御宇日本天皇詔旨」であり、国内向けは「明神御大八洲天皇詔旨」となっている。

では、「日本」という呼称は、いつ頃から使われ始めたのだろうか。601年に派遣された遣隋使は、隋に対してもまだ「倭王」という言葉を使っている。従って、のちに「聖徳太子」と呼ばれる厩戸王も、「日本人」ではなく「倭人」なのである。それに対して、701年に派遣された遣唐使が現地の唐人に「どこの使者か」と問われた時、「日本国の使者」と答えた。しかし唐人は「大倭国」の呼称を使って答えているから、「日本」という国号を決めたものの、それがまだ唐に伝わっていないことがわかる²⁴。

1998年に、奈良県飛鳥池遺跡で「天皇」と書いた7世紀後葉の木簡が出土した。この木簡は天武朝のものだと判断され、天武が編纂を命じた飛鳥浄御原令（689年完成）で「天皇」や「日本」の称号が定められた可能性が高まった。飛鳥浄御原令は現存しないが、701年に制定された大宝律令では「天皇」および「日本」が用いられている。7世紀末もしくは701年の大宝律令完成を

もって、「日本」という国と「日本人」が誕生するのである。

従って、それ以前の古墳時代にヤマト王権の支配が及んだ領域は、『魏志』倭人伝とは異なる意味での「倭国」であり、倭国に属する人という意味で「倭人」である。言うまでもなく、前方後円墳に象徴されるヤマト中心の文化圏の外にある北海道・東北北部や沖縄諸島は「倭国」ではないから、その住民も「倭人」ではない。また記紀や風土記は、ヤマト王権の影響を受けつつも独自の世界を築いていた南九州の人々を「熊襲」または「隼人」と呼び、関東・東南北部の人々は「蝦夷」と呼び、ヤマト王権下の人々と区別している。律令体制では、「隼人」「蝦夷」は「化外の人」として差別を受けている。さらに、律令体制下に加わった蝦夷に対しても、「俘囚」と呼んで、差別が続くのである。

名前をつけるということは、その特徴を認識し、分類するということである。「隼人」や「蝦夷」という名付けは、ヤマト王権やそれに続く律令政府が、南九州や東北地方の人々を自分達とは異なる文化の持ち主として認識していたことを意味する。律令政府自身が意図的に「異民族的存在」を残したのである。前方後円墳が存在するからといって、律令制の適応対象となったからといって、決して「共通する文化」で覆われたわけではなく、同一の所属意識をもっていたとも言えない。

7. 4世紀後半から5世紀前半の対韓交渉

さて、「日本人」を考える場合、大きな問題は渡来人との関係である。記紀等の文献史料によれば、朝鮮半島からの渡来人の波は、大きく3回ある。4世紀後半（神功・応神朝）、5世紀後葉から6世紀前半（雄略・継体・欽明朝）、そして7世紀後半（天智・天武朝）である。

かつては、もっぱら大陸の文化や技術が列島に伝わるという一方通交的な影響が研究対象であったが、近年の考古学の調査によって、列島から朝鮮半島へ渡った人や文物の存在が次々と確認され、その意味や背景について活発な議論が展開されている。まず、神功・応神朝に相当する4世紀後半から5世紀前葉についてとりあげる。

(1) 神功・応神朝の対韓交渉伝承

古墳時代に「倭国」を治めたヤマト王権の最高支配者は、古墳から出土した鏡や刀剣の銘文により、「大王」と呼ばれていたことが確認されている。しかし律令期に完成した記紀は、ヤマト王権の大王たちを「天皇」と記載している。そして記紀ともに、第10代の崇神を「初めて国を統治した天皇である」と記している。崇神は、記紀に記載された「天皇」のうち、実在した可能性のある最古の人物と考えられている。

記紀によれば、崇神・垂仁・景行の3代はいずれも三輪山周辺に宮をおき、崇神と景行は墓も三輪山周辺とされている。前述の如く、三輪山周辺は初めて前方後円墳が出現する地域でもあり、考古学・文献ともに三輪山周辺が王権誕生の地であったことを示している。この3代は、実年代をあてるとすれば3世紀後葉から4世紀前半のことである。

景行の後の成務・仲哀・神功皇后と、4世紀後半にあたる記紀の叙述はとりわけ後世の作為が大きく、文献からその実情を知ることが難しい時期である。その神功条に新羅征討伝承があり、続く応神条には渡来人の伝承が集中する²⁵。

神功記（以下、特定の“天皇”についての記述は、『古事記』は応神記、『日本書紀』は応神紀などと表記する）は出兵したというだけで具体的な記述はないが、神功紀では新羅や伽耶（加羅、任那とも書く）、百済との具体的な交渉の様子が記載されている。神功紀は、「百済記」などを引用して百済での事象や百済王の崩御などを記載しており、神功紀の暦を120年ほど遡らせれば、朝鮮半島の『三国史記』等で知られる史実と合致することが確認されている。神功皇后の実在性ははなはだ疑わしいものだが、朝鮮半島関係記事にはある程度の信憑性があり、4世紀の終わり頃に倭が朝鮮半島南部に出兵したことは事実であろうとみられていた。

その根拠の一つは、神功・応神条の出兵伝承でしばしば登場する「葛城襲津彦」にまつわる出来事が「百済記」にも記載されていることである。襲津彦は、「ヤマト政権を構成する中央諸豪族のうちで確実な史料によってとらえうる最古の氏族」であり、4世紀末から5世紀初頭に実在し、韓諸国との交

渉に深く関わった人物とされている²⁶。

もう一つの重要な根拠は、414年に建立された高句麗広開土王の碑文である。碑文には、396年に倭兵が出兵してから404年に帯方界に進出して敗退するまでの軍事行動が記されている。400年には、新羅城内に倭兵が充満し、新羅・高句麗軍がそれを敗退させ、倭兵は「任那加羅国」（金官伽耶国）に逃げ込んだとある。ここにみえる「倭兵」を日本列島ではなく朝鮮半島南部の加羅諸国に居住していた倭人であるという見方もあるが²⁷、いかんせんそれ以上のことを検証するには、文献史料が乏しく限界があった。

（2）伽耶南部と倭国

ところが近年、朝鮮半島南部における発掘調査で興味深い事実が明らかになってきた。4世紀の朝鮮半島南部は小国家が分立しており、伽耶と総称さ



図3 朝鮮半島諸国図
(平野邦雄『帰化人と古代国家』吉川弘文館1993年より)

れる(図3)。伽耶南部諸国のうち、洛東江下流域の金官伽耶の王墓とされる大成洞古墳群テソンドンや福泉洞古墳群ボクチョンドン、小伽耶の王墓良洞里古墳群ヤンドンニでは、4世紀中頃から5世紀前半にかけて、従来日本列島とくに畿内に特徴的とされてきた筒形銅器、石製模造品、仿製鏡、土師器などが集中的に副葬されているのである。これらの倭系遺物は、畿内勢力が伽耶南部諸国の要請を受けて援軍を派遣した際、相手国の王・将軍クラスへの贈答品だと考えられる。この畿内勢力とはヤマト王権なのだが、これを大和東南部(初期ヤマト王権)ではなく、4世紀後半から台頭する大和北部戦力と河内勢力からの贈与とし、伽耶南部から鉄器の入手ルートを得た大和北部と河内の勢力が、大和東南部勢力に代わって列島内での主導権を獲得したという見方もある²⁸。ヤマト王権も、王権内の勢力交替があったという理解である。

いずれにしても、これらの発掘成果によって、広開土王の碑文の記述がより具体性を帯びてきた。碑文にみえる「倭兵」は、朝鮮半島在住の人々ではなく、やはり列島の倭人なのである。5世紀初頭に、新たな朝鮮半島からの影響を受けて倭の武器・武具類が充実し、軍備がそれなりに完成するのも、こうした軍事行動の結果であると見ていい。

洛東江の下流域は、縄文時代以来、北部九州の人々が往来した縁の深い土地である。ここは、『魏志』倭人伝で韓から倭へ向かう際の出立地「狗邪韓国」にあたり、また『魏志』弁辰伝で「倭人が鉄をとりに来る」と書かれた地域の一角でもある。実際に、弥生時代の北部九州製の土器や銅矛、鏡、甕棺などが出土しており、北部九州の倭人がしばしば渡海していたことがうかがえる。おそらく鉄資源の入手が大きな目的であっただろう。

洛東江下流域勢力との交渉は、弥生時代までは主に北部九州の人々であったが、古墳時代になって畿内勢力が関与し始めたのも、やはり鉄資源の確保が重要課題であったと思われる。当時、鉄の威力は絶大であり、列島内での優位性を維持・拡大するために必要不可欠な品だったのである。

この時期、列島各地でも伽耶系の土器が出土する。とくに伽耶南部諸国のなかでも中心的位置を占めていた金官伽耶の土器は、近畿地方に多く出土している。金官伽耶製とみられる鉄鋌や鉄斧は、近畿から関東・東南北部の古

墳に副葬されている。注目されるのは、4世紀末から5世紀初頭に大阪・香川・京都・福岡でおこなわれた初期須恵器生産に、伽耶系工人の関与が想定されていることである。しかも、伽耶系といっても同一系統ではなく、地域によって金官伽耶系、安羅伽耶系、小伽耶系など系統が異なっており、それぞれの地域が独自に伽耶諸国と交渉ルートをもち、須恵器工人を確保した可能性が考えられている²⁹。その契機となったのは、それぞれの地域の首長がヤマト王権の軍事出兵に動員されたことではないかと推察される。

かつて、大陸の進んだ技術や文化は、ヤマト王権が独占的に入手した後、ヤマトから地方に分与したり、技術を伝えたという構図が当然のように語られていたけれども、地域独自の対韓交渉ルートも存在したのである。そして、地域の首長達は渡来集団の技術によって、自らの勢力を増強していった。その一例を、葛城襲津彦にみることができる。

(3) 葛城と吉備

伽耶への援軍派遣には、ヤマト王権下の各地の勢力が動員されている。神功・応神紀には、朝鮮半島へ派遣されたとして、葛城、平群、巨勢、紀、関東の上毛野などの人物が登場する³⁰。とりわけこの時期、注目されるのは葛城襲津彦の存在である。

神功紀5年条には、新羅が朝貢しなかったので、葛城襲津彦を派遣して討たせたとある。葛城襲津彦は、神功紀62年条（382年）でも新羅征討のために派遣されている。しかし同条に引用された「百濟記」によると、新羅が倭に朝貢しなかったので、倭が「沙至比跪さぢひく」を遣わせて新羅を討たせようとしたが、彼は加羅国を攻めたので、「天皇」が怒ったという。応神紀14年条にも、襲津彦を伽耶に派遣したが3年間帰国しなかったという話がある。

かつて大和国が倭国と葛城国に分かれていた³¹ことからわかるように、葛城はヤマト王権下の最有力勢力の一つである。葛城襲津彦の娘の磐之媛は仁徳皇后であり、続く履中・反正・允恭の母にあたる。そればかりか、仁徳から仁賢までの9代の大王のうち安康を除く8人は葛城の娘を后妃または母としており、5世紀のヤマト王権は「大王と葛城の両頭政権」という見方もある³²。神功・応神紀にみえる襲津彦の行動も、ヤマト王権の意向に反するも

のであり、「大和政権の将軍」³³という臣下の立場以上のものであったことを窺わせる³⁴。

奈良県御所市の室宮山（室大墓）古墳は、5世紀前葉の前方後円墳（全長238m）で、襲津彦の墓ではないかとみられている。この時期、奈良県では第2位の規模であり、古墳時代を通じて全国18位の規模を誇る。これほど勢力を拡大した契機が朝鮮半島との交渉であることは明らかであろう。葛城の拠点である大和国葛城郡（現、奈良県御所市・葛城市）は、奈良盆地のなかでも、5世紀から6世紀にかけて、朝鮮半島系の遺物や遺構が多い地域である。5世紀前半から始まる御所市南郷遺跡群は、伽耶系土器や朝鮮半島の技術による大壁建物跡などの他、玉・ガラス・銅・銀などさまざまな生産活動を示す遺物、導水施設と四面庇付大型建物からなる「祭祀」儀礼区などがあり、神功紀5年条に渡来集団を移住させたという「葛城四邑」の一つと考えられている³⁵。こうした渡来系集団による高い生産技術が葛城勢力の経済的・軍事的基盤となったものと思われる。

系譜をみれば、葛城は丹後・但馬・吉備と繋がりをもっている。おそらく、朝鮮半島への航路の確保に関わる関係と考えられる。吉備勢力は、応神・仁徳に妃を出すほどの存在であり、また朝鮮半島交渉でもしばしば登場している。吉備は、4世紀末から5世紀初頭の岡山市造山古墳（全長350m、全国4位）、5世紀前葉の総社市作山古墳（全長285m、全国9位）と、この時期に畿内の大王陵に匹敵する巨大な前方後円墳を築いている。造山古墳は、同時期では宮内庁が「履中天皇陵」に指定する大阪府百舌鳥山古墳と並んで全国最大規模である。造山古墳の周辺にある榊山古墳（円墳 直径35m）は、朝鮮半島産とみられる国内唯一の馬形帯鉤の他、多量の鉄器、鍛冶関連遺物、伽耶系土器が出土しているし、千足古墳は中部九州系の横穴式石室をもつ。他にも近隣には、5世紀前半から7世紀前半までの製鉄工房の窪木薬師遺跡や、製鉄関連遺物を副葬する5世紀前半の随庵古墳もある。吉備最古の須恵器窯である同市奥ヶ谷窯跡は5世紀初頭から始まり、伽耶系工人の関与が想定されている³⁶。神功・応神紀の対韓交渉に吉備系人物の名はみえないが、おそらくこの時期の伽耶救済のための新羅出兵に吉備勢力も関与したことが契機と

なって、伽耶系技術者集団の移住が実現したのだらう。

葛城と吉備の繋がりは、5世紀後葉の婚姻関係にうかがえる。まず、吉備上道臣田狭の妻毛媛は、葛城の円大臣の妹とみられる³⁷。この円大臣は、娘^{から}の韓媛を即位前の雄略の妻にいている。韓媛が生んだ王子は、のちに大王清寧となる。

雄略紀7年、雄略は吉備上道臣田狭の妻^{わか}稚媛が美しいことを聞き、稚媛を奪うために田狭を「任那国司」³⁸に派遣した。この稚媛についての別伝として、田狭の妻は葛城襲津彦の子玉宿禰の娘の毛媛だという記述がある。一方、雄略妃としての稚媛は、雄略紀元年条の本文では吉備上道臣の娘とされるが、吉備^{くぼや}窪屋臣の娘という別伝も載せており、上道臣の同一婚とみるより窪屋臣の娘とする方が妥当と考えられる³⁹。田狭は、同じ吉備の窪屋の首長の娘を妻としており、そこに葛城の娘をも娶った。そして葛城の首長家は、雄略および吉備の有力首長の両者と婚姻関係で繋がっていたのである。

田狭は、妻を奪われたことを恨み、新羅と通じた。そこで雄略は、新羅征討のために田狭の子・弟君を新羅征討のために派遣したが、田狭は弟君を誘って雄略に抗おうとした。田狭の記事の直前には、吉備下道臣前津屋が雄略への対抗心を露わにしたとして誅殺されているし、雄略没後、稚媛とその子磐城王子・星川王子は謀反を起こして殺された。

このように、ヤマト王権と対抗するほどの吉備と葛城が繋がっていることは、ヤマト王権にとっても脅威だったに違いない。この両勢力の伸長の基盤が、対韓交渉による渡来系技術の導入であったことは明らかであろう。5世紀末、葛城氏は雄略によって滅ぼされ、吉備上道臣は星川皇子の乱によって滅ぼされた。

(4) 百済と倭国

4世紀後半、百済は南へ勢力をのばそうとする高句麗に激しく攻撃されていた。伽耶は新羅に攻められていた。その新羅と高句麗が同盟関係を結んだことで、百済と伽耶は共通の敵をもつことになり、連携して対抗するために接近した。そして伽耶の仲介により、百済は倭に同盟を求めてきた。

それを示すのが、奈良県石上神宮の神宝の七支刀である。刀の銘文と神功

紀52年条の百済からの「七枝刀」献上記事から、この刀は、369年に百済王が倭王に贈るために造らせ、372年に倭にもたらされたものと考えられる。これが、倭と百済の国交の始まりである。百済が倭に期待したのは、軍事援助である。

応神紀8年条に引用された「百済記」によると、397年に百済王阿莘（花）王は太子直伎（腆支）を倭に人質として送った。高句麗広開土王の碑文にあるように、404年に倭兵が帯方域まで進出したのは、百済支援のためであろう。また応神紀16年条では、阿莘王が没した（405年）ので、直伎が倭兵100人に護衛されて帰国し、即位したことが記載されている。

このように、文献では倭と百済の関係が密である様子がかがえるのだが、わが国の遺跡で出土する朝鮮系遺物は、5世紀代にもなお百済より伽耶の遺物の方が優勢である。従って、この段階では、倭と百済も、伽耶諸国を仲介とした間接的な同盟関係であったと思われる。

8. 雄略朝から継体朝の倭韓交渉～5世紀後半から6世紀前半

(1) 画期としての雄略朝

5世紀後葉といえば、大王雄略の時代である。『日本書紀』は雄略朝から執筆が着手され⁴⁰、『万葉集』や『日本霊異記』は、雄略の歌や伝承から始まっている。雄略は、8世紀においても古代王朝を代表する大王として格別に意識されていたのである⁴¹。

雄略期には、部民制や氏姓制度が成立し、古代国家の基盤が飛躍的に充実した。葛城を滅ぼしたことも、政権の安定に繋がったであろう。「大王」の称号は、雄略から始まったという見方もある。倭王武が宋王朝から与えられた爵号は、それまでの倭王に比べて高位なものになっている。古代史における大きな画期とされる所以である。

埼玉県埼玉稲荷山古墳（5世紀後葉 前方後円墳 全長120m）出土の鉄剣銘文は、471年にこの鉄剣制作の依頼者であるワヲケがワカタケル大王（雄略）に「杖刀人首」（武官）として仕えていたことを記念してこの剣を作ったとある。「杖刀人首」は、杖刀人集団を率いるトモノミヤツコ（伴造）にあた

る。同じ頃に築かれた熊本県江田船山古墳（5世紀後葉から6世紀前葉 前方後円墳 全長62m）で出土した鉄刀銘文にも、ワカタケルに「典曹人」（文官）として仕えていたとの記述がある。これらの銘文から、雄略期には少なくとも東は埼玉、西は熊本まで、トモ（部民制の前身）または部民制が及んでいたと考えられている。

478年に倭王武（雄略）が南朝宋に提出した上奏文にみえる「東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平らぐること九十五国」という自信に溢れた文章は、そうした実績から生まれたものといえよう。もっとも、「（海北を）平らぐる」を含め、この記述全体が誇張表現であることは言うまでもない。

（2）積極的な百済支援

雄略期は、百済との同盟関係が緊密になった時期でもある。雄略紀に引用される「百済記」や「百済新撰」によると、461年（雄略紀8年）、百済の蓋鹵王の命を受けて、弟の軍君（昆支）が人質として倭にやってきた。475年に高句麗からの攻撃により百済の漢城が陥落したため、百済は熊津（現、公州）に都を移した。雄略紀21年条には、熊津遷都を支援した様子が記されている。さらに479年（雄略紀23年）、百済の文斤王が死去したため、倭にいた軍君の第2子である末多を本国に送還するため、雄略は筑紫の兵士500人を護衛につけて送り届け、即位を支援した。これが東城王である。さらにこの時、筑紫の安到臣・馬飼臣の船軍を派遣して、高句麗を討たせている。

ヤマト王権は軍隊を派遣した見返りとして、百済から技術者や学者を得た。前述の吉備上道臣田狭が「任那」に遣られた後、田狭の子・弟君と吉備海部直赤尾は、新羅征討とともに、百済から技術者集団を得るために派遣された。弟君は、新羅とは戦わずに百済に出向き、百済王が奉ったという新たな技術者集団「新来伎人」を率いて帰国した。この時の技術者は、陶部、鞍部、画部、錦部、訳語らであり、百済系渡来氏族である東漢直鞠に命じて、飛鳥の上桃原、下桃原、真神原に住まわせたという。飛鳥地方も、5世紀から6世紀にかけて朝鮮半島系の遺物や遺跡が集中する地域である。

百済から技術者・学者を得ることは、倭の生産力の向上や社会変革、価値

観の刷新をもたらすというだけでなく、そうした最先端の技術や知識を提供することによって列島内におけるヤマト王権の優位性を示すという意味をあわせもっていた。

加えて、5世紀代にさかんにおこなわれた倭王の中国南朝への遣使は、朝鮮半島西海岸から山東半島へのルートが用いられたと推定されている。5世紀末から6世紀初頭の韓国扶安郡竹幕洞遺跡では、海岸沿いで福岡県沖ノ島と類似する祭祀遺物が多量に出土しており、倭人が朝鮮半島西海岸における航海の安全祈願をしたものと思われる。ヤマト王権は、この航路を確保するためにも、高句麗の侵略から百済を守る必要があったのである。

(3) 韓国荣山江流域の前方後円墳

百済は、475年に熊津に都を移し、国を再興させた後、南の伽耶西部地域に勢力を伸ばそうとする。

5世紀後半から6世紀前半にかけて、朝鮮半島南西部の荣山江流域に10基余の前方後円墳が存在し、北・中部九州系の横穴式石室、朝鮮半島の他の地域には存在しない埴輪や倭系遺物をそなえていることが、近年明らかになってきた(図4)⁴²。

これらの前方後円墳は、それぞれの地域で最大規模の古墳ではなく、ひとつの盆地に1基程度の分散した分布を示し、また一代限りで終わるのが特徴である。前方後円墳のなかには、百済系の遺物を副葬するものもあることから、こうした前方後円墳の出現は、熊津遷都後の百済の南方進出の動きと連動した現象と考えられる。

これらの前方後円墳の被葬者については、親倭在地勢力とみる説と在韓倭人とみる説に分かれ、いまなお議論が続いている。前者は、百済による全南地方領有化政策を警戒した在地勢力が、倭勢力との強い結びつきを示すために前方後円墳を採用したと考える⁴³。それに対して後者は、渡韓した北・中部九州勢力が築いたものとする⁴⁴。

いずれにしても、荣山江流域の土器が北・中部九州だけでなく畿内周辺、さらに東日本でも出土することや、荣山江流域の埴輪や石室に僅かながら北陸や尾張、関東の影響もみられることから、北・中部九州勢力は独自の活動

として渡韓したのではなく、ヤマト王権の意向を受けて百済・在地勢力・伽耶諸国との外交交渉に携わったものと考えられる。ちょうどこの時期、北・中部九州では百済・伽耶系の遺物を副葬する古墳が各地に点在する。また、宇土半島流域のいわゆる阿蘇石製の石棺が畿内各地の古墳に採用されており、中部九州勢力が石棺の提供を通じてヤマト王権と緊密な関係を築いていたことがうかがえる。

(4) 継体大王と百済武寧王

502年、武寧王が即位した。有名な和歌山県隅田八幡宮所蔵の画像鏡の銘文は、503年に武寧王がオホド王（即位前の継体）に贈られたものとされる。継体は506年に即位した。以後、倭の継体大王と百済の武寧王はより強力な同盟関係を築いていく。

武寧王については、雄略5年（461年）条に、生誕にまつわる伝承がある。百済王の弟・軍君が人質として倭へ来る途中、兄王から授かった妊娠中の王妃が筑紫の加羅島で出産したので「斯麻」と名付けられ、母とともに本国に送り返されたという。1971年に発見された公州市宋山里古墳群の武寧王陵の墓誌により王が462年生まれであることなど、雄略紀の記述とほぼ合致していることが学界を驚かせた。

武寧王の木棺はコウヤマキ製である。コウヤマキは日本列島の古墳の木棺によく使われた木材であるが、朝鮮半島には自生していない。倭国から運ばれたものとみられ、継体大王と武寧王の密接な関係を物語っている。

この時期に、百済の南下政策が本格化する（図5）。継体紀6年（512年）、百済への「任那割讓」問題が起きた。上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁の「任那四県」を百済に割讓したという。さらに継体紀7年には、百済に己汶・帶沙を与えたとある。「任那四県」の比定地については若干の意見の相違もあるけれども、帶沙は河東地方で異論はなく、己汶は全羅南道南原と推測されている（図4）。おおむね全羅南道と慶尚南道の境にあたる蟾津江流域およびその西側地域であり、上述の前方後円墳が築かれる地域である。

『日本書紀』は、あたかもヤマト王権が「任那四県」や「己汶・帶沙」を支配していたかのように記述しているが、それは『日本書紀』の作為である。

この地域の古墳の副葬品には大伽耶系の遺物がみられることから、倭ではなく、当時伽耶諸国の盟主的存在になっていた大伽耶の傘下にあったと考えられている⁴⁵。「任那割讓」とは、実際には伽耶地域に進出しようとする百済の意向をヤマト王権が承認・支持したということのようである。

百済は、こうした伽耶南西部への進出および高句麗との攻防にそなえて倭に軍事援助を求め、その見返りとして、倭へ自国の文物の他、中国南朝（梁）との通交で得た五経博士、医学博士、暦博士などを頻繁に派遣した。後の欽

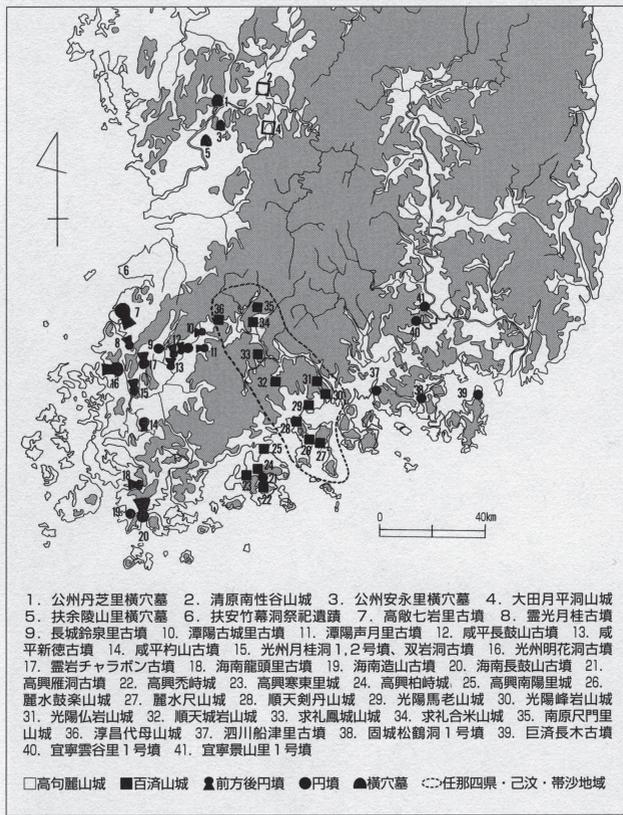


図4 崇山江流域の倭系古墳分布図
 (朴天秀『加耶と倭』講談社選書2007年より)

明朝に仏教が伝わるのも、こうした動きの一環である。雄略の後、南朝への遣使を停止したヤマト王権にとって、百済は中国文化の提供者としても貴重だったのである。

「任那割譲」を進言したのは、この年6月に百済に派遣された穗積臣押山である。12月に百済の使者が倭に派遣された時、押山は下哆唎国守として一時帰国し、「任那四県」の割譲を進めたのである。以後も、このような在韓倭人もしくは倭系百済官人が百済と倭の交渉にあたっている。ヤマト王権と百済との緊密な関係が、ここにも窺えよう。

継体紀21年（527年）、継体は新羅によって征服された伽耶南部の金官加耶と浹己吞を回復させるために、筑紫君磐井に新羅征討を命じたが、新羅と通

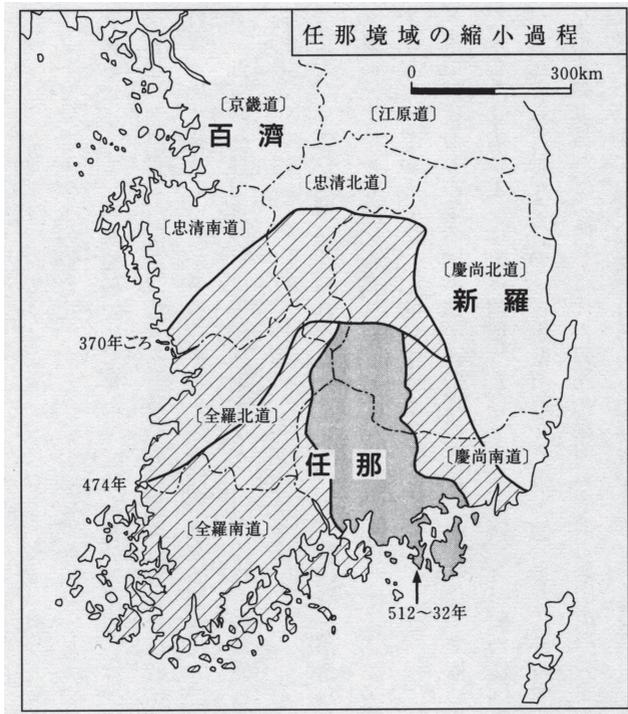


図5 『日本書紀』に書かれた任那の変遷図
(山尾幸久「五、六世紀の日朝関係」『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会2002年より)

じていた磐井は出兵を拒否して、ヤマト王権側に戦いを挑んだ。継体・磐井戦争である。

百済にとってもヤマト王権にとっても、北・中部九州勢力と栄山江流域の在地勢力の結びつきがあまりに深まることは警戒すべき事態であったと思われる。そして、おそらく継体は、栄山江流域における北・中部勢力の影響力を排除し、百済との交渉を直接掌握しようとしたのだらう。磐井が新羅と結んで武装蜂起したというのは、自分達を排除しようとする百済とヤマト王権に対する抵抗だったと考えられる。磐井の敗北を契機とし、栄山江流域での前方後円墳の築造は停止し、畿内で阿蘇石製の石棺が採用されることもなくなった。

(5) 欽明朝と「任那」問題

同じ頃、新羅は伽耶諸国のうち金官加耶（532年滅亡）や卓淳（530年前後滅亡）を攻略し、安羅伽耶に迫った。531年、安羅伽耶と同盟関係にあった百済は、安羅伽耶からの救援要請を受けて、安羅伽耶に駐屯した。安羅を境として百済と新羅の緊張関係が続いたが、欽明紀2年（541年）、百済は新羅といった和議を結ぶ一方で、「任那復興会議」ともいべき交渉が開催された。この会議は、新羅に占領された伽耶諸国の復興をめざすことが表向きの目的とされたが、実際には百済が伽耶諸国をとりこむことだった。その結果、多くの伽耶諸国は百済についたが、安羅伽耶は新羅についた。当時の安羅伽耶にはヤマト王権が派遣した倭人達が滞在しており、なかには土着化して安羅伽耶の役人になった倭人もいた。その倭系官人が新羅と通じていたのである。ヤマト王権は、百済の進出を抑えようとして百済よりも安羅伽耶の意向を支持し、百済と対立した。その後まもなく安羅伽耶は新羅にとりこまれたために、ついに百済—伽耶南部—倭の同盟関係は破綻する。

ちなみに「任那日本府」という言葉は『日本書紀』欽明天皇条にしかなく、しかも上記の「任那復興会議」に関連する記事に限定されている。おそらく、安羅伽耶に居留した「倭臣」達の館のことを、後の時代に「任那日本府」と表現したものと考えられている。

551年、百済・新羅の連合軍は高句麗から漢城を奪取するが、翌年新羅が

漢城を占拠し、西海岸まで領域を拡大した。百済と新羅の和議は決裂し、554年に百済は新羅に敗北し、百済側についた伽耶諸国の盟主・大伽耶国が562年に新羅に滅ぼされ、伽耶は新羅領に組み込まれてしまった。

(6) 列島での朝鮮半島系遺物

①大伽耶系遺物

5世紀後半は、列島に新たな朝鮮半島からの文物や技術が渡来する時期である。まず、金銅製の冠・耳飾り・飾履など、朝鮮半島の王族クラスの装いの品が流入する。馬具や横穴式石室が本格的に定着・普及し始める。武器・武具類にも、朝鮮半島からの新たな影響が認められる。朝鮮半島の陶質土器の流れを汲む須恵器生産が本格化する。朝鮮半島系の土器の出土も、圧倒的にこの時期が多い。稲作導入に次ぐ、大陸文化導入の第2波と言っている。

この時期には、大伽耶が伽耶諸国の中心的地位を占めるようになり、金官伽耶系の文物に代わり、大伽耶系の土器・装身具・武器・武具・馬具などが列島で出土し始める。大伽耶国の土器が福岡・熊本・愛媛・大阪・島根・岐阜・山形などで出土するだけでなく、金銅製装身具（冠・耳飾り・飾履）や武器、馬具などの威信財も、大伽耶系とみられるものが中心で、九州から関東にかけての広い範囲で古墳の副葬品となっている。伽耶諸国の盟主であった大伽耶は、百済と新羅の両方から攻められる危機感から、ヤマト王権のみならず列島各地の有力勢力へも働きかけていたようである。

いまのところ、列島でもっとも早く金銅製冠を副葬するのは、5世紀後葉の熊本県江田船山古墳と福井県二本松山古墳である。

前に紹介したワカタケルの名を刻んだ銘文入り鉄刀を出土した熊本県江田船山古墳は、この鉄刀の出土だけでなく、朝鮮半島製の豪華な副葬品をもつことで古くから有名な前方後円墳である。副葬品のうち、古相の垂飾付耳飾・帯金具・馬具は大伽耶系、新相の冠・耳飾り・飾履は百済系とされ、562年に没した武寧王陵の出土品との類似が指摘されている。古相は雄略朝、新相は継体朝にあたる。遺物を詳細に検討した桃崎祐輔は、古相の被葬者を鉄刀銘文に雄略朝に「典曹人」として勤仕したと記される无利豆本人、新相の追葬者は无利豆の子で、百済武寧王朝に奉仕した倭系官人だったのではないかと

と推測している⁴⁶。

一方、福井県では県西部の若狭国と県東部の越前国の領域において、大伽耶系の遺物がみられる。若狭国は5世紀後半を中心として、向山1号墳と西塚古墳の金銅製耳飾り、十善の森古墳の馬具などの大伽耶系遺物がある。若狭国のこれらの古墳の所在地である旧上中町は、膳臣の根拠地である。雄略8年に、高句麗に攻められた新羅を助けるために、「任那王」が派遣した將軍の一人に膳臣斑鳩の名がみえる。

そして、県東部の越前国では、5世紀後葉に、天神山7号墳の耳飾りや二本松山古墳の冠がある。二本松山古墳では2点の冠が出土しているが、そのうちの1点が大伽耶の王墓群とされる池山洞古墳群32号墳出土の金銅製冠と酷似することで著名である。

二本松山古墳が属する松岡・丸岡古墳群は、4世紀末から6世紀中頃まで継続する北陸最大規模の前方後円墳群であり、近くには507年に即位した継体大王の母振媛の故地・高椋がある。『日本書紀』によれば、継体は幼い頃、父の彦主王が亡くなった後、母の振媛に連れられて母の実家のある越前国高椋で養育されたとある。松岡・丸岡古墳群は、継体の母方の出身勢力が築いた古墳群とみていい。二本松山古墳は、継体ゆかりの人物の古墳である可能性が高いのである。二本松山古墳の冠は、その技法から舶載品ではなく列島で制作されたものとみられ、その製作には大伽耶からの渡来工人が関わった可能性が想定されている⁴⁷。越前にいたオホド王（後の継体）がヤマト王権の大王に即位したという異例な事態の背景として、継体即位前の若狭・越前勢力と大伽耶勢力との密接な繋がりは無視できないだろう。

また、継体が幼い頃に過ごした近江国高島郡に所在する鴨稻荷山古墳（6世紀前半 前方後円墳 推定約45m）も金銅製の冠・耳飾り・飾履など金銅製装身具を豊富にもつ古墳である。ただし、金銅製冠は百済系とされるもので、継体朝に対外交渉が伽耶から百済へ替わったことを反映している。また詳細は不明であるが、継体の出自でもある息長氏の拠点である琵琶湖の北東部にある近江町山津照神社古墳（6世紀中頃 前方後円墳 推定約45m）でも冠が出土している。継体を擁立したとみられる複数の勢力が、それぞれに朝鮮

半島の威信財である冠をもっていることは興味深い。

②百済系遺物

5世紀後葉頃から、列島でも百済系文物が登場し始める。文献では、とくに5世紀末から6世紀前半にかけて非常に緊密な関係をもつのだが、考古学ではなかなかその状況が掴みにくい。というのは、5世紀になると栄山江流域に百済の文化や技術の影響が伝わっているのが、百済から直接もたらされたのか、栄山江流域や伽耶から伝わったのか、判断が難しいのである。実際に北・中部九州では、百済系と大伽耶系の両方の遺物を副葬する古墳が少なくない。従って、列島各地で出土する百済系遺物も大伽耶系遺物も、直接もたらされたとみるか、栄山江流域または北・中部勢力から間接的に入手したかの判断が難しいのである。

上記のような威信財は物だけが贈答品として動く可能性があり、必ずしも生産地の人間の移動に伴うとは限らないのに対して、日常容器である土器は、人の動きを比較的ストレートに反映しているとみていい遺物である。だが不思議なことに、百済系土器は5世紀後葉に一時的に登場してすぐに出なくなる。しかも、その分布は北部九州と畿内に集中しており、475年の熊津（現、公州）遷都にともない、畿内に移住してきた百済人集団がいたという見方がある⁴⁸。しかし、畿内ではむしろ栄山江流域の土器の方が多い。文献にみえる百済と倭の親密な関係は、栄山江流域が交渉の舞台だったのかもしれない。

③新羅系遺物

『日本書紀』では、新羅との対立関係を示す記述が多いのだが、それでも新羅は頻繁にヤマト王権に使者を派遣している。新羅が国力を高め、伽耶東部に進出し始める時期である。『日本書紀』にみえる新羅の頻繁な遣使は、高句麗・百済との戦いや、伽耶地域への進出に際し、ヤマト王権の理解と協力を得ようとしたのだろう。ただし、ヤマト王権は基本的に伽耶・百済の側である。

倭と対立していたにもかかわらず、新羅の遺物が5世紀中頃から6世紀にかけて、列島各地で出土することは、百済系遺物のあり方と対照的で興味深い。新羅系土器は、日本海沿岸から山陰、北陸、滋賀、東海地方などに多く

みられる。5世紀末から6世紀初頭にかけての時期に、伽耶や百済の土器が少なくなっても、新羅系土器はすぐには減らない。もっとも新羅系土器といっても、釜山や金海などの土器もあるので、新羅の影響を受けた洛東江下流の金官伽耶あたりが畿内を介さずに列島各地と交流していた可能性が指摘されている⁴⁹。

またこの時期、九州から関東にいたる広い範囲で、新羅系の金銅製の装身具、武器・武具、馬具類などが出土し、新羅では王陵級の古墳でヒスイ製勾玉など倭系遺物が出土する。新羅では、金製冠に多数のヒスイ製勾玉を垂下することが流行する。ヒスイは、朝鮮半島には原産地がなく、新潟県の姫川産のヒスイがもちこまれたものと考えられる。倭でも新羅でも、相手から入手したものは有力者層の威信財である。

こうした遺物のあり方から、大伴金村や筑紫君磐井、安羅の在韓倭人達の動きにみられるように、列島各地に新羅派がいたことが推察される。考古資料から政治・社会情勢をよみとることに限界もあるけれど、ヤマト王権中心の文献史料にはあらわれにくい多元的・重層的な倭と朝鮮半島の交渉の様子を考古資料が示している。

以上みてきたように、倭国の政治体制や生産体制の整備・充実は、列島内部の社会情勢の変化・成熟だけでなく、朝鮮半島の国々との交渉のなかで進展していったのである。しかも、その交渉はヤマト王権が独占的におこなっていたのではなく、列島各地の勢力も独自の交渉ルートをもち、それぞれに勢力を充実させていった。それは、影響を受けたなどというレベルではなく、朝鮮半島諸国との関わりを抜きにして倭国の形成は語れないと言ってもいい。また恒常的に戦乱の緊張状態にあった朝鮮半島の国々にとっても、倭の存在は大きかったのである。朝鮮半島諸国は倭からの軍事支援を、倭国は朝鮮半島諸国の進んだ技術や知識を必要とした。お互いに足りないものを補完しあいながら、それぞれの国力を養い、自らの主導的地位を強化しようとしたのである。

9. 朝鮮半島における倭系官人たち

従来は、古代の倭韓交渉といえば、もっぱら朝鮮半島から列島への文物や人物の渡来が研究対象となってきたが、列島から朝鮮半島に移住・土着した倭人達がいたことにも触れておこう。

百済は、伽耶諸国への侵出を図った6世紀中頃、伽耶諸国や倭国との交渉に倭系官人を多用する。541年から554年(欽明2～15年)にかけて、『百済本紀』を引用する欽明紀には、紀臣奈率弥麻沙、物部連奈率用奇多、物部施徳麻奇牟、施德斯那奴次酒、許勢奈率奇麻、物部奈率奇非、上部徳率科野新羅、上部奈率物部鳥というように、信濃・紀・物部・許勢(巨勢)という倭の地名や氏族名を残しながら、奈率・上部など百済の官職名が示すように百済官人である。紀臣奈率弥麻沙については、「紀臣が韓の女性と結婚して生まれた子で、百済に留まり奈率になった、父は不明。他の場合も同様である」という注がついている。紀氏も吉備氏、物部氏も、朝鮮半島にしばしば派遣された氏族である。ヤマト王権から派遣された倭の人々が土着したのだろう。

これ以前にも、継体紀24年条(530年)には「吉備韓子那多利・斯布利」の注として、「韓子」は倭人と韓人女性との間に生まれた子とある。敏達12年(583年)には、百済在住の「火葦北国造阿利斯登」の子で倭系官人の日羅が敏達によって百済から召喚されるのだが、百済王は日羅を惜しんでなかなか出発させなかったという。

こうした百済の倭系官人たちは、百済から倭への使者に随行するなど、百済の対倭交渉の場面で活躍をした。記録に残らない在韓倭人やその2世、さらに百済の官僚にまでなった倭人たちは、他にも数多くいただろう。『隋書』百済伝には、「その人、雜りて新羅・高麗・倭などあり。また中国人もあり」という記述がある。百済のみならず伽耶諸国や新羅にも、移住した倭人は多かったと思われる。

10. 文献にみえる渡来系氏族

① 応神朝の渡来伝承

わが国の古代史において、もっとも古く、また代表的な渡来系氏族は秦・^{はた}

あや・ふみ
漢・史の三氏である。畿内の渡来系渡来氏族の歴史はこの三氏族から展開するといつてよく、それぞれに多くの枝族に分化していった。なかでも秦氏と漢氏は古代渡来系氏族の双璧と謳われる。

朝鮮半島からの渡来伝承は、応神朝に集中する。秦氏は、山背国葛野郡を本拠地とした。応神紀14年条に弓月君が120県の民を率いて渡来したという。弓月君は、秦の始皇帝の子孫と称するが、実際にはかつて辰（秦）韓と呼ばれた新羅からの渡来者と推定される。漢氏は、「東漢」や「倭漢」とも書かれ、大和国高市郡を本拠地とした。応神朝20年条に倭漢氏の祖阿智使主が、子・つかのおみ（東漢直掬）と自分の党類十七県の人々を率いて来帰したという。『新撰姓氏録』では、阿智使主を後漢の靈帝の子孫とするが、実際には百済からの渡来集団とみられる。西漢氏とも呼ばれた西文氏は、文首・文直・書首・書直ともかき、河内国古市・丹比の2郡を本拠地とした。応神紀16年に百済から来朝した学者王仁の子孫という。

応神朝の渡来伝承はそのまま事実と捉えることはできず、後の時代に応神朝に渡来伝承を集中させたものとの考えられている。4世紀後葉といえ、すでに述べたように百済と倭の正式な国交が始まった時期である。百済系の漢氏・文氏に関していえば、この時期に渡来した可能性は否定できないだろう。応神紀15年に、西文氏の祖・王仁を迎えにいったとされる上毛野臣祖の荒田別と巫別は、神功紀49年条に新羅征討のために派遣された將軍として名がみえる。神功皇后条の暦を信頼すると、王仁の来朝は370年頃となる。しかし、百済との国交は372年の七支刀の贈与に始まるから、王仁の渡来はそれ以後まもなくとみた方がよからう。

②渡来系氏族の技術と知識

渡来系氏族が、古代国家形成に果たした役割とは、大陸の新しい技術や知識を提供することである。それらの技術や知識は、倭国の生産力を増強し、社会を刷新し、文化を熟成するだけでなく、そうした変化をもたらすことが結果的に王権の威信向上にも繋がるのである。

秦氏が得意としたのは、機織り・農耕・酒造・灌漑技術・鋳銅、木工など、いずれも列島にもすでに存在した技術である。もちろんそれぞれの分野で先

進技術を提供したであろうが、生活基盤にかかわる地道な分野である。こうした分野の技術で倭社会にくいこむことができたのは、4世紀後葉の渡来集団の波のなかでも早い段階であったと推測される。秦氏は、数の上では最大規模ではあるが、記録に名前が残る秦氏の人物が少なく、政治的地位でみれば東漢氏には遠く及ばない。秦氏が提供する技術と王権との結びつきが希薄だったためと考えられる。秦氏は、政界よりも生産活動で財力を蓄え、その財力で聖徳太子や桓武天皇などの王族を支えるという面が強かったのだろう。

東漢氏は、雄略朝に「いまきのてひと今来才伎」と呼ばれる新たな技術者集団が百済から来朝する。『新撰姓氏録』によれば、阿智使主の故地に優れた技術者達がいるので呼び寄せたとある。東漢氏が率いたのは、陶部・鞍部・画部・錦部・訳語・金作、韓鍛冶など、それまでの倭にはなかった新しい技術・知識をもつ集団であり、いずれも王権の威信を高める先進技術といえよう。

前述の如く、雄略朝は百済と倭の繋がりが密になる時期である。考古学的にみれば、栄山江流域に前方後円墳が出現する時期である。百済はたびたび倭に軍事力の提供を求め、その見返りとして、中国南朝との通交で得た梁の五経博士、医学博士、暦博士などの知識人や技術者を倭に派遣した。これらの渡来集団は、百済が通交する中国南朝から得た技術や知識をもたらすものとして、ヤマト王権にとって貴重な存在であった。

東漢氏は、雄略から遺言で白髮王子（清寧）の即位を託されたり、呉への使者となるなど、高級官僚としても活躍する。秦氏とは大きく異なる展開であり、その違いは、それぞれが保持する技術・知識の違いに起因するといえるだろう。秦氏は土豪的・在地的、東漢氏は宮廷的・都市的といわれる所以である⁵⁰。

西文氏の祖とされる王仁は優れた学者として招来された人物で、西文氏も文筆専門の氏族である。しかし、秦氏同様、記紀に登場する人物はなぜか少ない。やがて「今来伎人」王辰爾一族の方が本系より優勢となる。王辰爾は百済貴須王の子孫といい、西文氏本系の王仁より高位の先祖伝承をもつ。王辰爾一族の渡来時期は明らかではないが、欽明紀14年（553年）に王辰爾が

登場しているので、その少し前かと推測される。敏達紀元年（572年）、高句麗からの使者が持参した国書を東西の史が読めなかったが、王辰爾が読み解き、東西の史が敏達から叱責されるという記述がある。以後の王辰爾一族は、西文氏とも接する河内国丹比郡を根拠地とし、西文氏の専業であった文筆、とくに朝廷の財政収支の計算・記録を専業として、やがて西文氏を凌ぐ勢力となった。それは、王辰爾が百済王の子孫であるという出自の高さとともに、文筆分野における西文氏の知識や技術が時代遅れとなったためであろう。やがて西文氏は、王辰爾一族と族的結合をしていく。新たな渡来集団がもちこむ技術や知識が、旧来の渡来集団を没落させるのである。

③雄略朝の渡来集団と部民制の成立

雄略紀には、秦氏・漢氏がそれぞれトモノミヤツコ（伴造）として多くの部民を率いて朝廷に出仕したことを記す記述がある。古代国家の新たな政治組織としての部民制は、こうした渡来集団の組織化から始まると考えられている。

部民制は、ヤマト王権への従属・奉仕の体制であり、刑部・蘇我部など宮や豪族に所属する一団の人々をさす場合と、馬飼部・語部などの世襲的職能集団の2種がある。部民制の先駆的な体制として、すでに5世紀には宮廷の各種職務を世襲的に分掌するトモ（伴）の制度が成立していたのだが、それがトモノミヤツコがトモを率いるという形の部民制に発展したのが5世紀後葉の雄略朝とみられている。大勢の民を引き連れて渡来したという応神紀の渡来伝承は、秦氏・漢氏がこうしたトモノミヤツコの地位を獲得した後に作られた伝承と推測される。旧来のトモに加えて、雄略朝の「今来伎人」を新種のトモとして組織化することで、宮廷の職務分掌組織は著しく整備拡充された。トモを部と表記することも、百済の制度にあり、百済系渡来集団の影響によるとみられている⁵¹。

秦氏は全国に秦人・秦部などの貢納民をもっていた。後の史料を含めてみれば、その範囲は、東は美濃・尾張・越前・越中、西は備中・讃岐・筑前・豊前に及び、在来氏族も含め、古代氏族のなかで最大規模と考えられている⁵²。漢氏もまた、漢人・漢部をもっていた。もちろん、これらは血縁で結

ばれた同族ではない。秦氏も漢氏も、一族以外の各地の渡来者達を同族として取り込むことで、巨大化していったのである。

10. 「日本」誕生

(1) 7世紀前半～蘇我氏と百済

6世紀末から7世紀前半の用明・推古の母は、蘇我稲目の娘である。推古期には、蘇我馬子と用明の子厩戸王（聖徳太子）が積極的に政治に参加し、遣隋使・遣唐使の派遣、仏教推進と初の寺院建立、「十七条の憲法」策定など、中国を中心とする東アジアの国際社会への参入をめざした新しい国作りに取り組んだ。新興勢力だった蘇我氏は、大王欽明に妃をいれて急速に勢力を伸ばし、大王家と競うほどに成長した。その背景には、蘇我氏が多くの渡来系集団を傘下に加えたことがある。とくに百済系渡来系集団を多く抱えたのは、蘇我氏自身が百済系渡来氏族であったためという見方もある⁵³。蘇我氏については、5世紀後葉に渡来し、履中・雄略に仕えた百済の有力官僚木笏満智を祖とする渡来氏族であるという可能性は無視できない。馬子が建立した法興寺（飛鳥寺）は、厩戸王の四天王寺とともに、わが国初の本格的な寺院である。法興寺建立にあたり、百済は僧侶および数多くの技術者を派遣した。これらの技術者のなかには、中国やイスラム系の名前もみえる。そして法興寺の塔の心柱を建てる際、馬子ら百余人は「百済服」を着て参列した。蘇我氏の全盛期である。

(2) 7世紀後半～「日本」誕生

645年、かつての教科書では『日本書紀』の記述そのままに、「大化の改新」によって新政府が誕生したかのような記述がおこなわれていたが、近年では、大王家を脅かすほどに強大化した蘇我の本家（蝦夷・入鹿）を倒すクーデターであったという理解が主流となっている。これも、朝鮮半島の情勢と無関係ではない。642年、高句麗では宰相の泉蓋蘇文（淵蓋蘇文とも）が国王・大臣ら100余人を殺害し、権力を握った。百済では641年に即位した義慈王がクーデターをおこし、対立する有力者層を国外に追放して権力を掌握。翌642年に、旧伽耶諸国の領域を奪回すべく、新羅の支配する洛東江沿岸一帯に攻め

入り、勝利を取めた。この敗北に危機感を強めた新羅は、高句麗に救援を求めたが拒否されたため、唐に援助を要請した。高句麗のクーデターと新羅からの救援要請が、644年に始まる唐の朝鮮半島進出の名目となったのである。新羅でも、647年に真徳女王に反発する重臣達が反乱をおこしたが、女王を支持する將軍金庾信と王族金春秋によって鎮圧され、強力な政権の確立へと向かう。

百済と高句麗のクーデターについては、642年のうちに、即位したばかりの倭の大王皇極のもとに届いた。百済の義慈王の弟王子・翹岐と4人の同母妹、有力者達40名余が島流しとなり、翹岐は妻子と従者を連れて倭に逃れてきた。朝鮮半島での相次ぐクーデターを目の当たりにし、大王と競いあうほどの蝦夷・入鹿への警戒心は、いっそう強まったに違いない。

そして645年、皇極の王子・中大兄（後の天智）らのクーデターによって蘇我我家は滅亡し、中大兄が実権を握った。しかし、政権を安定させる間もなく、朝鮮半島の動乱にまきこまれていく。660年に唐・新羅連合軍によって百済が滅亡し、663年に百済復興をめざして倭軍が参戦した白村江の戦いも大敗に終わった。668年には高句麗も、滅亡した。その結果、7世紀後半に百済と高句麗の滅亡に伴う大量の亡命渡来人がやってくるのである。

天智朝には、百済の男女400余人を近江国神崎郡へ、2000余人を東国へ、また2000余人を近江国蒲生郡に安置する指示がでており、きわめた大規模な渡来があったことがうかがえる。

672年、壬申の乱という古代史上最大の内乱を勝ちぬいて即位した天武は、朝鮮半島の国々の興亡を目の当たりにし、白村江の戦いでの大敗を体験したことに加え、壬申の乱において政府軍に属して敵対した多くの有力氏族達を従えていかねばならない苦境を打破するために、自身の立場の絶対化とともに、国際社会でも通用する中央集権国家の建設を強く志向した。そして、軍備体制の確立、姓の再編成と官僚組織の確立、私有地私有民の禁止、鎮護国家をめざした仏教の推進、宮廷祭祀の充実、歴史書の編纂、都城建設、飛鳥浄御原令の制定など、新しい国造りを驚くほどの勢いで進めた。律令体制の基礎のほとんどが、天武と天武の遺志を継いだ持統（天武皇后）によって築

かれているのである。「天皇」という地位も、「日本」という国号を使うことも、こうした天武による新しい国家建設にとまなうものである。

7世紀後半に渡来した百済や高句麗から亡命者のなかには高級官僚や知識人、技術者も含まれており、文章・医薬・陰陽・天文・兵法・造仏・冶金・暦算など高度な学問・技術を職務とした。彼らは、天智・天武朝の新たな国家体制の整備・充実において重要な役割を果たした。また、こうした技術や知識をもたない亡命渡来人達は、東国などに集団移住させられ、未開地の開拓・開墾の推進力となった。

天武がめざした律令国家の手本は唐である。しかし、遣唐使の派遣は669年から702年まで、約30年間のブランクがある。この間、もっとも頻繁に使者を派遣してきたのが朝鮮半島を統一した新羅である。新羅は遣唐使を送り続けており、いち早く律令体制の導入も手がけていた。この時期の唐文化は、新羅からもたらされたものと考えられる。

律令国家「日本」の基盤形成は、これら多くの渡来集団の存在や新羅との交渉を抜きにしては語れない。

(3) 渡来系氏族の歴史の終焉

律令国家となり、新たに大量の渡来者が移住・定着することはなくなった。7世紀後半の新たな渡来集団がもちこんだ新しい技術や知識は、時とともに周辺の人々にも普及・定着していき、しだいに渡来系集団に特化した技術や知識ではなくなっていった。知識や学問、特定技術を名にもって伝統的職務として世襲する、いわゆる「名負氏」^{なおいのうじ}はしだいに有名無実化し、8世紀前半の「雑戸解放」を経て、渡来人としての特性を急速に失っていくのである。

それを決定づけたのは、724年と761年におこなわれた和姓への改姓である。この結果、たとえば吉→吉田連、楽浪→高丘連、狛→古衆連・長背連、韓→中山連、王→楊津連、佐魯→小川造、高麗→御井など、在来氏族と区別がつきにくくなった。

平安初期の815年に政府が編纂した『新撰姓氏録』は、こうした改姓による氏姓の混乱を正すために、畿内に居住する氏族の先祖伝承を提出させたものである。『新撰姓氏録』の内容も信憑性には問題があるが、1182の氏族が「皇

別」(高貴之枝葉)、「神別」(日本之神胤)、「蕃別」(渡来系)の3種に区分されており、それぞれ1:1:1の割合を示している。つまり、畿内に居住する氏族の3分の1が「蕃別」つまり依然として渡来系の出自を語っているのである。『新撰姓氏録』によれば、渡来系氏族が「皇別」や「神別」を称した例もあるというから、もっと多くの渡来系氏族がいたかもしれない。

言うまでもなく、『新撰姓氏録』の区分は血筋ではない。血筋としてみれば、たとえば、よく知られているように桓武天皇の母は百済系渡来氏族の和朝臣氏であるし、桓武自身も百済王教仁を後宮とし、大田親王をもうけた。また、桓武を支えた右大臣藤原継縄も、百済王明信を妻とし、藤原乙叡らをもうけた。渡来系氏族と在来氏族との婚姻が禁止されていたわけではないので、血筋での区分など不可能である。

記録に名前の残らない渡来集団も夥しい数である。奈良時代にも、716年、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野7国の高句麗人1799人を武蔵国に移して高麗郡を置いたという。785年(延暦4年)、坂上大宿禰刈田麻呂の提出した奏状によると、百済からの民が男女とも大勢いて、ついに大和国高市郡で受け入れきれなくなり、諸国の漢人として分置されるようになったという。799年には、甲斐国の百済系渡来人190人が和姓に改姓している。他にも挙げればキリがないほど、各地に渡来集団の存在が確認できる。

これほど多くの渡来集団が移住しているのである。現在、自分は日本人だと思っている人でも、長い歴史のどこかで渡来系の血を受けているはずである。“純血日本人”など、あり得ないのである。

「日本人単一民族論」の成立過程を追求した小熊英二によれば、明治から戦前までの日本民族論において、「日本は、多くの民族が混血、融合してできあがった多民族国家である」という主張が主流を占めていた。けれどもそれは、先にも触れた日鮮同祖論と同様、大陸や南方に領土拡張し、異民族を支配下にとりこもうという帝国主義的発想を正当化する論として支持されたものである。当時の論者達は、古来より日本は大量の異民族や渡来人を平和的に受け入れ、同化・融合してきた国であるとし、それを日本民族の統治・同化能力の優秀性として誇らしげに語っている。現実問題として、明治政府

は朝鮮・台湾を併合し、総人口の3割に及ぶ非日系人を「臣民」として帝国への奉仕を義務づけたのだから、当時の日本は単一民族国家ではなかったのである。

日本が単一民族国家だという主張は、敗戦後もはや国内に非日系人を大量に抱えなくなった日本において、大きな流れとなっていく。それは、戦前の民族融合国家という主張が植民地支配志向であったことへの反省と、記紀神話を歴史的事実とみなす皇国史観の否定から生まれた。小熊はさらにその背景として、戦後の象徴天皇制、敗戦による国際関係への自信喪失、戦争の疲弊感からくる一国平和主義などを挙げている。戦後の日本がめざすべき姿として、大陸から孤立して太古の昔から単一民族が平和に暮らしていた農業国がイメージされていたのである。また小熊は、中国・韓国のような同姓不婚・異姓不養の原則をもたない日本のイエ制度が、血縁への強いこだわりと同時に血縁意識の曖昧さを共存させ、日本人の純潔意識を生み、他者との軋轢を避けたいという閉鎖性も生まれてきた、とする⁵⁴。

太古の昔から「日本民族」がいたと、なんとなく思ってしまったという現代日本の病いの治療法は、やはり「日本」という国や「日本人」の成り立ちを正しく知ることである。しかし文部科学省は、国際化社会にむけて公立高校の必修科目を世界史とし、日本史は選択科目とした。そのため、日本史は大学受験で点数がとりにくいと敬遠され、多くの学生は中学校レベルの知識で止まっている。朝鮮半島が南北に分かれたことに日本が関与していることも、ほとんどの学生が知らないのである。自国の歴史について、基本的な学習も不十分なままで、国際人になれると思っているのだろうか。そうだとしたら、この国の病はそうとう深刻である。

考古学も文献史学も、従来の「日本」のイメージを大きく塗り替える研究成果を豊富に蓄積している。考古学と日本史の研究者は、その成果をもっと広く社会に伝え、旧来の歴史観を刷新させていかななくてはならない。いまの歴史教育のあり方は、根本的に見直すべきである。敗戦後に創られた「日本民族」という共同幻想を乗り越えなければ、本当の意味での国際人にはなれないばかりか、終戦をいつまでたっても迎えられない。今年、韓国併合か

ら100年目にあたる。いま一度「日本」および「日本人」について考え、より良い日韓関係を構築する新たな100年の出発点になって欲しいと願っている。

- 1 尾本恵一「日本人のルーツを科学する」『検証・日本列島～自然、ヒト、文化のルーツ』第13回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会 1999年
- 2 網野善彦『「日本」とは何か』講談社学術文庫 2008年
- 3 網野善彦『日本論の視座』小学館 1990年
- 4 稲田孝司「旧石器時代概説」『日本の考古学』上 奈良文化財研究所編 2007年
- 5 ドイツケルン大学の較正プログラム CalPal2004に基づいた較正年代による
- 6 注3に同じ
- 7 馬場悠夫「日本の更新世人骨」『日本の考古学』上 奈良文化財研究所編 2007年
- 8 甲元眞之「先史時代の対外交流」『日本の社会史1 列島内外の交通と国家』岩波書店 1987年
- 9 川崎保「球状耳飾と管玉の出現～縄文早期末・前期初頭の石製装身具セットの意義」『考古学雑誌』83-3 1998
- 10 近年、国立歴史民俗博物館は AMS 法を用いた放射性炭素年代測定の結果、弥生時代の始まりが紀元前10世紀に遡ると発表した。しかし、資料の扱い、データの解釈、大陸文化との整合性などの点で問題も多く、いまだ学界の共通認識には至っていない。ここでは、旧来の年代観を採用する。
- 11 常木晃「農耕誕生」『食糧生産社会の考古学』朝倉書房 1999年
- 12 『日本考古学協会2007年度熊本大会研究発表資料集』2007年
- 13 清野謙次『日本民族生成論』日本評論社 1946年
- 14 長谷部言人「人類の進化と日本人の顕現」『民族学研究』第一三巻第三号 1949年
- 15 金関丈夫「日本民族の系統と起源」ブリタニカ『国際大百科事典』15 1974年
- 16 埴原和郎『日本人の起源』朝日選書 1984年
- 17 鈴木尚『骨から見た日本人のルーツ』岩波新書 1983年
- 18 工藤雅樹「日本人種・民族論」『論争・学説 日本の考古学1 総論』雄山閣出版 1987年

- 19 関晃『帰化人』1956年（講談社学術文庫 2006年）、上田正昭『帰化人』中公新書 1965年
- 20 平野邦雄『帰化人と古代国家』吉川弘文館 1993年
- 21 『宋書』、『南齊書』、『梁書』
- 22 岸俊男「『倭』から「ヤマト」へ」『日本の古代1巻 倭人の登場』中央公論社 1985年
- 23 注22と同じ
- 24 『続日本紀』慶雲元年（704年）7月条
- 25 これに先立ち、崇神朝に渡来したという大加羅国の皇子都怒我阿羅斯等（つぬがあらしと）や垂仁朝の新羅王子天日矛（あめのひほこ）の伝承があるけれども、そのまま事実として扱えないものである。
- 26 井上光貞「帝紀からみた葛城氏」『日本古代国家の研究』岩波書店 1965年、門脇禎二『葛城と古代国家』講談社学術文庫 2000年
- 27 井上秀雄『倭・倭人・倭国』人文書院 1991年
- 28 福永伸哉「四、五世紀における韓日交渉の考古学的再検討—対半島交渉からみた古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論集』第12集 1998年、朴天秀『加耶と倭』講談社選書 2007年
- 29 注28 朴論文
- 30 「葛城氏」「平群氏」などという氏姓制度が成立したのは5世紀末のことであり、それ以前の「葛城」とか「平群」は地名である。門脇禎二『葛城と古代国家』講談社学術文庫 2000年
- 31 倭国造と葛城国造が存在したことによる。
- 32 直木孝次郎「葛城氏とヤマト政権と天皇」藤沢一夫先生古稀記念『古文化論叢』1983年
- 33 注26 井上光貞論文
- 34 注26 門脇禎二論文
- 35 青柳泰介「大和の渡来人」『ヤマト王権と渡来人』サンライズ出版 2005年
- 36 亀田修一「吉備の渡来人と鉄生産」『ヤマト王権と渡来人』サンライズ出版 2005年
- 37 吉田晶「吉備氏伝承に関する基礎的考察」『岡山の歴史と文化』福武書店 1986年

- 38 「任那国司」の名称は他にみえず、実態は不明。少なくとも「国司」は、雄略朝には存在しない官職である。田中俊明によれば、「任那」の呼称は、朝鮮史料では3ヶ所しかなく、もっぱら『日本書紀』で多く使われる呼称である。しかし、その使い方は曖昧で、伽耶諸国全体をさす場合もあれば、「任那国」として伽耶諸国のなかの一国をさす場合もある。朝鮮史料では、金官伽耶をさす。中国史料にも「任那」が使われることがあるが、加羅と併用されているので、この場合の「任那」は大伽耶をさすとみられる。『日本書紀』では、継体朝以後に多用され、「任那のミヤケ（天皇家の直轄地）」という意味でも用いられる。「大和朝廷は4世紀後半、朝鮮半島に出兵し、新羅を服属させて伽耶諸国を平定し、そこを天皇の直轄地「ミヤケ（官家）」として支配・経営するようになり、その統治のために任那日本府を置いた。最初は金官国に置き、後に安羅国に移した。そうした支配は562年、新羅に敗北するまで続いた」という考え方が1970年代まで、日本の古代史学界で一般的だった。しかし現在では、「任那日本府」の存在は否定されている。「任那」とは、「任那支配」・「任那日本府」と結びつく呼称であるので、地域をさす呼称としては伽耶（加耶・加羅・駕洛などとも書く）を用いるべきである。（講演録「任那問題」と古代日朝関係」2002年）

従って、雄略6年条にみえる「任那国司」も、伽耶諸国のどこかに派遣されたという以上のことは言えない。

- 39 注26 門脇禎二論文
- 40 『日本書紀』は、用字や文章の形態、用いられている暦の違いによって、雄略朝から始まる巻14以降とそれ以前の巻で大きく二分されることはよく知られている。古代中国音韻学の森博達は、雄略朝以降のグループが先に執筆され、唐朝の正音（標準音）に精通していた渡来唐人が述作したもの、巻13以前のグループは、誤用や訓読みがまじるなどから、前者より遅れた時期に日本人によって執筆されたとみている。森博達『日本書紀の謎を解く』中公新書 1999年
- 41 岸俊男「古代の画期 雄略朝からの展望」『日本の古代巻6 王権をめぐる戦い』中央公論社 1986年
- 42 西谷正「韓国で発見された「前方後円墳」について」『考古学ジャーナル』236 1984年、東潮「栄山江流域と慕韓」『展望考古学』1995年、岡内三真編『韓国の前方後円形墳』雄山閣出版 1996年、小栗明彦「光州月桂洞1号墳出土埴輪の評価」

- 『古代学研究』第137号 1997年、小栗明彦「全南地方出土の埴輪の意義」『百済研究』32 2000年、『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会 2002年、『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会 2002年、注28 朴天秀論文
- 43 柳沢一男「全南地方の栄山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会 2002年、田中俊明「百済と倭の関係」『検証古代日本と百済』大巧社 2002年など
- 44 注28 朴天秀論文
- 45 注28 朴天秀論文
- 46 桃崎祐輔「江田船山古墳遺物群の年代をめぐる予察」『王権と武器を信仰』同成社 2008年
- 47 注28 朴天秀論文
- 48 白井克也「土器からみた地域間交流—日本出土の馬韓・百済土器」『検証古代日本と百済』大巧社2002年
- 49 注48と同じ
- 50 関晃『帰化人』三秀舎 1966年、平野邦雄『帰化人と古代国家』吉川弘文館 1993年
- 51 狩野久「部民制」『講座日本史1』東京大学出版 2004年、鎌田元一「部民制の展開」『日本の古代巻6 王権をめぐる戦い』中央公論社 1986年
- 52 平野邦雄「秦氏の研究」『大化前代社会組織の研究』吉川弘文館 1969年
- 53 門脇禎二『新版 飛鳥』NHK ブックス 1977年、『古代日本の「地域王国」と「ヤマト王国」』（下）学生社 2000年
- 54 小熊英二『単一民族神話の起源』新曜社 1995年